
Angel or Devil ~ 笑顔を無くした少年の物語 ~

龍の鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel or Devil 笑顔を無くした少年の物語

【Nコード】

N8770N

【作者名】

龍の鈴

【あらすじ】

周りの人のために何かしてあげようといつも人のために頑張ってきた

きた高校生

たちはなりゅういち
橘龍一。

だが、彼に待っていたのは便利屋として利用されていたという事実。友達から。そして、自分の好きな人から…。

彼は自分の苦しみや悲しみを誰にも相談できず、ついには生きる意味を見失ってしまった。

そんな時、彼は本当に死んでしまう。

だが、神は見捨てなかった。彼の人生にもう1度チャンスを与えたのだ。

それは異世界に龍一を送るというものだった。

彼は異世界で生きる意味、自分の笑顔を取り戻すことができるのか？

途中から主人公最強になる予定です。

只今、編集作業を行っています。再開に少々お時間を頂くことになりそうなのでご了承下さい。

第1話 俺が死んだ日（前書き）

初投稿です。

ちよつとシリアスな感じで始まりますW
それではどうぞ^^

第1話 俺が死んだ日

その日、俺は18年という短い人生を終えた。

理由は簡単だ。

俺が自転車に乗っているところに居眠り運転のトラックが突っ込んだからだ…。

急いで駆け付けた救急隊員ですらゾツとするような表情で見えていた。それぐらい身体の状態はひどかった。

その後、自分の死体を空中から見ただけだけど奇妙な感覚がした…。

さすがに自分の葬式までは見ていないけどね。。。

死んだ。っと実感した時、正直言って俺は安心した…。
やっとこの世界とおさらばできると思ったから。。。

俺の名前は橘龍一^{たちはなひりゅういち}。18歳。

いよいよ受験が迫ってきている高校3年生だ。。。

まあ、受験っていうか自分の人生とかどうなっても構わないと思っ
ている駄目な人間だ…。

ってかもう生きていようが死んでいようが構わないくらいだった。

まさに、生きる屍。そんな表現が今の俺を表しているといつてもい
いだろう。

しかし、俺も最初からこうだったわけじゃない…。

先月までは、5年前に亡くなった両親から、周りの人には優しくし
なさいと言われながら育ってきたせいか、かなりのお人よしで、い
つも笑顔を振り撒いていた。

5

何をやっても平凡。身長もそんなに大きくなり決してモテる人間な
んかじゃない。

そんな自分でも、必死になって何かをやれば、誰かが喜んで感謝し
てくれる。

中学までは、それだけで十分だった。

高校に上がるとやたら恋の仲介役をやらされることが多くなったが、
それでも俺は頑張った。

そんな中、自分にも好きな人が出来た。

彼女のためなら自分のすべてを例え命であつてもかけてもいいとさえ思った。

しかし、彼女に告白出来ないままいつの間にか3年の月日が流れていた。

このままだと何も変わらない、そう思った俺は人生初の告白し、彼女と付き合うこととなった。

俺は幸せだった。

受験だろうがなんだろうが突破することができると確信さえ出来た。

そう。これで俺の人生はすべて上手くいくはずだったのだ…。

しかし…。

世の中はそんなに上手くいかない。

付き合つて二週間後、彼女からの突然の呼び出しに焦っていくと彼女からの第一声。

「あやし、この人と結婚するんだ!」

いつもより明らかにハイテンションで携帯の画面を俺に見せた。

画面に写っていたのは27歳くらいの大人の男性だった…。

「これからも龍一とは掛け替えのない友達でいたいし、恋とかについて色々相談したいからよろしく!!」

そうだったのだ。

何がよろしくだ。

都合良すぎるだろ。

俺は利用されたのか。

そして、

俺は絶望した。

3年間、彼女に尽くしてきたつもりだった…なのに…。

さらに、俺に追い撃ちをかけたのは自分に真の友達と呼べる人がいないという事実。

お人よしの性格は周りには利用されるだけされて、内心毛嫌いされていたというわけだ。

俺はただ利用される駒だった。

だから、相談相手と呼べる人が誰もいなかった。

それに気づいたら瞬間、俺は人生に絶望し、学校にも通わなくなっ
た…。

8

結局、自分以外は何も信用出来ない。

そう思い、俺から笑顔や思いやりという感情が消えた。

「ここは何処だろう…。」
俺は微妙な浮遊感を感じながら、辺りを見渡した。

どうやら何処かの応接室のようだ。

一応ソファーがあったから俺はどっぴり座り、自分の人生を振り返った…。

…いつの間にか泣いていたようだ…。

『散々な人生だったな。』

白い髭を生やした老人がいつの間にか目の前に座って俺のことを眺めていた。

「あんだ誰?？」

正直どうでもよかったが一応聞いておくことにした。

『わしは創造者、観察者、神とかと呼ばれるものだ。』

「へえ〜。神様が俺に何か用??地獄にでもたたき落とすってか?」

『お主には本当に悪いことをした。お主のことはかなり前から気になって天界から、覗いていたんだが…。つらかっただろう。そんなお主に少しでも希望を抱いてもらえるように、これからはお主の人生が少しでも楽しいものになるようにわしの権限ギリギリまで使ってやるうと思っていたんだが…まさか、こんなに早く死んでしまうとは…。』

「別にどうでもいいし…。ってか同情なんかいらない。」

『そう、絶望しないでくれ。ここで人生を終えても、つまらないだろう…。だからもう一度やり直してみないか？？』

「うるさい。この世界の何処がいいんだ。」「感情が感じられないくらいに細々と言った。」

『この世界は嫌いか？』

「あたりまえだろ。逆にこの世界のどこがいいんだよ。」「ぶっきらぼうに俺は言い放った。」

『そう言うだろうと思っていお主には違う世、所謂、異世界に行ってもらおうと思っただが…。』

「もう、いいよ。どこに行こうが俺は何も変わらない。」

『だが、お主にもまだ、現世でやりたいことがあっただろう!!！すべては叶えられないかもしれないが、違う世界で試してみないか？』

「お前ならきつと…」

神様と名乗る人がそう言った瞬間

「俺は誰からも本心から必要とされることなんてない人間じゃないんだ！！！何をやってても平凡。何か特別な力があるわけでもない。そんな俺に何が出来るんだ！！」

つと今まで誰にも言わなかった本音が出てしまった。

一瞬、神様は困ったような顔をしたが気を取り直して

『そうか……。ならお主が欲する力とやらをやるう。』

そういつて神が俺の額に手を当てた。

光を包み込み自分の内から温かいものが込み上げてきた。

「何をしたんだ？」

『お主の言う力とやらを分けただけだ。それだけの力があれば誰にもなめられたりはしない。だからそれをうまく使って新たな人生を切り開くがいい。』

「具体的に何をしろと？」

こういう場合は色々制約がつくのだろうと思って聞いてみたが

『お主の好きなようにやればよい。今からお主が行く世界は魔法やモンスターが当たり前に存在する世界だ。そこで本当にやりたかったことを成し遂げる！』

そういつて神は何処かに消えてしまった。

俺も徐々に意識が遠退いていった。

第1話 俺が死んだ日（後書き）

いかがでしたか？

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願ひします。

第2話 目が覚めると…（前書き）

連投になります。

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

第2話 目が覚めると…

あたりを見渡すと一面に草原が広がっていた。

「ここはどこだ…?」

先ほどまで神様と名乗る者と会話をしていたはずなのだが…。

「異世界?」

神様が言っていた言葉を思い出す。

「…にしても、ここは明らかに日本じゃないだろうな…。」

草原といっても牧場とかとういうレベルのものじゃなかった。

ふと自分の恰好を見ると学生服（ブレザー）にスニーカーまではいいのだが…

腰に見慣れぬものがある。

気になったので取り出してみると「銃?」

そうやって俺が取り出したのは一見するとソードオフタイプのシヨットガンのようにも見えるが、どうやらハンドガン、いやハンドキヤノンのようなものであった。

俺は昔から銃とかそういうものが好きでエアガンやガスガンなども持っていたがこのようなものは初めて見た。

色はフレームがブラックで、スライドがシルバーと言う感じ。なかなかカッコいいデザインだ。重さ約5?、長さ約12インチ。マガジンは一応あるようだが中身は空だ。

そして、銃身に何か文字が刻んである。

【Diablo】
どうやら銃の名前らしい。ディアブロ、たしか悪魔とかそんな感じの意味だなw

悪魔の銃?悪魔殺しの銃?
どちらかはわからない。

とりあえず、ためし撃ちをしようと近くの木に向けてトリガーを引いてみる。

カチッ。

「ん?」

カチッカチッ。

「?」

カチッカチッカチッ。

「撃てねえじゃん…。」

銃をホルスターに戻しなんとなくポケットに手を突っ込んだ。すると、1枚の紙切れがあった。

「なんだこれ?」

そう思いながら紙切れを開いてみると

『ディアブロは魔力を使用して撃つ銃だ。』
そう書いてあった。

どうやら神様からの伝言らしい…。なかなか親切な神様である。

今度は自分の体の中から得体のしれない力を出す感じのイメージをしながら銃をホルスターから抜き、木に向かってトリガーを引いた。
グオーーーーーンッ。

とんでもない轟音と共に木が砕け散り、長さ10mほど地面を抉った。

「すげえ威力…」

反動も凄まじかったがなぜか俺には片手で撃てた。

それから何発か撃ってわかったのは。

- ・リロード必要無し。
- ・弾は自分の中でイメージしたものが飛び出す。
- ・連射も可能。
- ・威力調節も可能。
- ・照準は自分で合わせないとダメ。
- ・弾丸の軌道を操ることは少しなら可能。

こんな感じだ。

やはり、銃は男の憧れだと改めて思った俺だった。

乱射しすぎたせいで地面がクレーターのようになっていたが、性能の確認が出来たので気にせず草原を歩いて行った。

2時間ほど歩くと湖に着いた。

水を掬うと、とても澄んでいたので一口飲んでみた。

「うまい……」

こちらに来てから何も口にしていなかったのでとりあえず、喉を潤すことにした。

多少汗をかいたので顔も洗い空を見上げて横になった。

そしてそのまま眠ってしまった。

辺りがやけに騒がしくなり目が覚めた。

「いいから、金を出せって言ってるんだろ!!」

「そんなに命がいらねえのか??」

「さっさと出せ!!」

遠目から確認すると一台の馬車を山賊らしき50人くらいの軍団が取り囲んでいる

そしてその馬車の向こうに何やら街道が見えた。

(あそこから町まで行けそうだな。)

そう思い、よつこらしよと腰を上げ山賊達に近づいていった。

「往生際が悪いなあ〜さつさと出せよ!」

まだ、そんな言い争いをしているのかと呆れながら山賊の後ろを通つて街道に抜け…ようとした。

「おい!! 貴様、何者だ!!」「…。」

「ここを通すわけにはいかねえよなあ〜!」

そんなことを言いながら俺を囲んできた。

(こいつらバカなんじゃねえの…。)
そう思いシカトする。

「無視してんじゃねえ!!」そういつて一人が殴りかかってきた。

咄嗟にディアブロを抜き、威力を最初にし、トリガーを引いた。

轟音と共に殴りかかってきたやつが5mほど吹っ飛んだ。
幸い死んではないみたいだが…。

「邪魔。」

一言そういつて街道に沿って歩いて…いこうとした。

「何さらしてんじゃ！！」

そういつて先程、俺を囲んでいたやつ全員と馬車を囲んでいた全員が飛び掛かってきた。

(めんどくせえな)

そう思いながらトリガーを数回引く。

特に意識せず撃つたので、先程より圧倒的に高い威力で山賊達を弾丸が貫通しながら炸裂していった。生き残ったもの一人もおらず、辺りは地獄と化した。

炸裂弾頭というやつだ。

そして、残っていたやつらは何やら悪態を付きながら何処かに逃げてしまった。

(初めて、人を殺してしまった…。しかも、あんなに大勢。日本人は平和ボケしていると言われているが確かにそうかもしれない…。だけど、人を殺したのに殆ど罪悪感を微塵も感じない…。今までも殺したいと思うことはあっても実際に殺ったことはない。(あたりまえか。)でも殺さなきゃ殺されてただろうし…。だが、一瞬楽しいとすら感じた。俺は本当に壊れてしまったのかもしれない…。)

俺は空を見上げながらぶつぶつと何かいいながら人を殺してしまつたことを考えていた。

すると、後ろから

「あのお〜」

と女性っぽい声と共に肩を叩かれた。

反射的にディアブロを抜いてその女性もとい女の子突き付けた。

「ひっ!!!」

明らかに怯えた表情をしたが俺は銃口を彼女の額に当てたままにした。

護衛っぽい人が全員、剣や杖を抜いた。

「何だ?」

先程と違いやたら低い声で彼女に尋ねた。

「あ、あの…助けていただいております。ありがとうございます。」
「どうやら、先程の馬車に乗っていた女の子のようだ。」

よく見ると彼女は銀髪に蒼い瞳で、誰がどうみても美少女と言える身なりだった。どこか高貴な雰囲気、歳は俺と同じくらいだろう。

そう思いながら彼女を観察していると

「ど、どうかしましたか??」

と怯えながら聞いてきた。

俺が何も答えずにいると、何か思い出したように

「あの、助けてもらったお礼をしたいのですが…」

「必要無い。お前を助けたわけじゃない。」

そういつて俺は街道を歩き出した。

「まっ待ってください!!」

そういつて、慌てて追いかけてきた女の子が俺の制服の端を掴んだ。

後ろで従者の人が何か叫んでいるようだ。

肩で息をしながら

「せ、せめ、せめて、名前だけでも…。」

「リユーイチ・タチバナ」そういつて俺は街道にそつて歩き出した。

しかし、女の子がまた追いかけてきて龍一の袖を掴んで何か言いた
そうな表情で顔を覗きこんだ。

瞬間、龍一は彼女の方を振り返り、ディアブロを抜いていた。

銃口を森の方に向け静かにトリガーを引いた。

今までの中での最高出力だ。

彼女はあまりの轟音に、目をつぶり耳を塞いで地面に伏せた。

そして目を開けると龍一の姿は無く、森は300mほど削りとられていた。後ろから護衛と従者が大慌てで走ってきた。

「リユーイチ・タチバナ??随分変わった名前の方ですね…。
それに黒髪に黒い瞳、あんな威力の魔法なんて見たことがない…。
でも、どうして私に見知らぬ武器を突き付けながら泣きそうな表情
をしていたのかしら??
そう、まるで『助けて』とでも言いたいような表情で…。」

そんなことを少女が呟いているとは、龍一が知る由もなかった。

第2話 目が覚めると…（後書き）

本作で使われている【Diablo】はLamborghini Diabloという車のほうの名称で使われたもので、正式には【Diavolo】です。イタリア語で悪魔という意味になります。

今回は、主人公が初めて人を殺したという心境を書いていたのですが、なかなか難しいです。
どこか、お気づきの点がありましたらよろしくお願いします。

用語解説

フレーム

銃のフレームのこと

スライド

よく映画でチャッキンと引いている部分のこと

ソードオフタイプのショットガン

ターミネーター2でシュワちゃんが使っているやつのようなもの
こと

ホルスター

ベルトなどに通して銃を携帯する際に入れておくもの。

第3話 過去の自分と未来の自分(前書き)

なんとか、2日連続投稿できました。

誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

第3話 過去の自分と未来の自分

俺は、別に女の子が嫌いなわけじゃない。

むしろ先程の子はとてかわい子だと思った…。

だが、人を好きになっても苦しいだけだ。相手は自分のことを利用しようとしている。そんなことばかり考えてしまう。

そして、友達関係というやつは表面上の付き合いが殆どだ。

俺の悩み、苦しみを知る人など前の世界にはいなかった。

今度もそうだろう…。

丸腰の女の子に銃を突き付けるなんて男としては最低な行為だとは思う。

しかし無理矢理とはいえやってきた世界でも前と同じように嘗められて利用されるのはゴメンだ…。

だから彼女に銃を向けた。

そう自分に言い聞かせた。

情けないとは思わない。

人とはそういうものなのだから…。

「龍一君っていつも優しくしてくれて、とてもいい人だとは思っけど…それは恋愛感情とは違うんだよね…。」彼女と別れた時に言われたセリフ。

「龍一って、感謝してるそぶりさえ見せれば何でもやってくれるよねえ〜」

「そうそう！でも、あいつの話ってつまらねえよな…」

「確かに…。ただ、あいつのお陰で付き合えたやつはかなりいるみたいだから利用価値はあるよな…！」

「そうねえ〜。まあ、龍一の彼女になりたいと思う子なんて絶対いないわよ…！」「わかる。わかる。仮に付き合ったとしても散々、貢がせてポイツて感じだよね…」

自分が扉の外で聞いていることも知らずに話すクラスメイト達のセリフ。

「龍一君も可哀相よね…。両親をあんなに早くに亡くすなんて。」

「本当。本当。あんなだったら生まれてこないほうがよかったんじゃないかしら」

近所で話す主婦の人達の囁き声。

こんなことを言われて人を信じるだど??

嘗めるな。

俺にだって理性はある。

そう思いながらも何も行動せず学校に行かないという行為で逃げた俺。

思い出すうちに、ちょっと涙が出てきたので慌てて擦る。

そう。

結局、俺は利用されるだけの駒。

本心から俺を求めるやつ、などいない。

甘い餌をちらつかせて俺を利用する。

(どうせ、さっきのやつもお礼とかいって家に招き、隙が出来たらこの銃を奪おうとしたんだろうな…)

そう思いながらひたすら道を歩くのだった。

そして2時間後、日が沈みはじめた頃、やっと街についた。
城門のところでもやたら兵士に見られたがなんとか通ることができた。

「…にしてもこの町の豪華さはなんなんだ…」

ここは学園都市エルヴィスと言う街らしい。

学園都市なだけに自分と同じ年くらいの人ばかりだった。

しかも聞いた話によればここには1校の学校しかないという。

「どんだけでかい学校だよ…」

とりあえず食べ物を買おうと思って商店街までやってきた。

しかし、いざ買い物しようという時になって重大なことを思い出した。

(そついや、この世界の金、持ってない…)

そう、神様からもらったのは銃だけ。

いくら異世界とはいえ貨幣制度はあるだろう…。

さて、どうしたものか…。

(商店街の人にはジロジロみられるわ通行人には指を差されるわでまるでパンダにでもなった気分だ…まあ、この場に長居するのも気が引けるな。)

商店街を歩きながら、金を得る方法を考えているうちに夜になってしまった。

食べ物といい匂いを嗅ぎながら俺は街をさまよった。

商店街の路地に入り、何か食べ物は無いか探そうかと思ったが惨めな気がしたのでやめた。

とりあえず、何も食わなくても何日かは生きていけるだろうし、詳しいことは明るくなってから考えようと思い、商店街から少し離れたところにあるレンガ造りの壁に寄り掛かって寝ることにした。

気が付くと俺は死んだ時に飛ばされた空間にいた。

先程と同じようにソファーに腰掛けると、目の前には神様がいた。

「俺は、また死んだのか？」

『いや、ここはお主の夢の中じゃよ。どうだ異世界は??』

「勝手に入ってくるなよ…。別に普通。面白くもなんともない。」

。

俺が答えると神様は少し乗り出すようにして

『そうだろうか??お主はお主なりにこの世界での生き方を模索しているように見えたのだが…』
と言ってきた。

「そんなこと思ってねえよ。」

俺は表情を一切変えずにそう答えた。

『人を殺してもか??』

こいつ、見てたのか…。

一瞬ビクッと反応してしまっただがすぐに落ち着いて

「あれは、しょうがないだろ。」

『なぜじゃ??向こうに殺意はなかったんじゃないのか?』

「それは…。」

確かに言われてみれば相手に殺意があつたかはわからない…。あれは正当防衛だつたのだろうか?

『まあ、わしは別にお主が殺しをしたことを咎める気は無い。こう考えると異世界に来て、少しは変わった気がするじゃろ?以前のお主じゃ人殺しなんて無理だつたじゃろ。』

人殺しにお咎め無しって、神なのにおかしな話だ…。

でも、人殺しを普通にできたということは紛れもない事実だつたし。神間の言葉にも納得できた。

「まあ、根本的には変わってねえだろ。それに、また利用されそうになつたしな。」

このままではちょっと自分が不利になる気がするのでとりあえず話題を変えることにした。

『彼女のことを言っておるのか??なぜ、彼女がお主を利用していと断言できる?お前は彼女のとそんなに親しいのか?彼女が人をだますような人間に見えたのか??』

「疑つて当然だろ。それに、断言できん無くても利用されて後悔するくらいなら先に、手を打つのはあたりまえのことだろ。」

俺は当たり前前のことを言つたつもりだったが、神様は小さなため息をついて

『…まあ、この答えはお主が自力で見つけないと意味が無いのでな…。』

そう言っつてうなだれた。

「わけがわからねえ…。あ、遅くなっただけどディアブロありがとう
な。」

『まあ、それは餞別として受け取ってくれ。それは、セレクターと
呼ばれる魔法を発動する際の媒体じゃ。もちろん、これ無しでも魔
法は使える。だが、セレクターを使うことによつて詠唱の手間を省
けることができるのじゃ。そのうえ、それぞれのセレクターには様
々な性質が備わつておる。まあ、銃の形はお主のだけじゃがな。』

「なるほどね…。便利なものだな…。」

つと言つてディアブロを抜いてみた。

『まあ、詳しいことは学校で習えばよい。』

「学校？」

『この世界で生きていくための力を身につけるのにも、仲間を見つ
けるにも学校は最適だからな。』

「学校なんて行かなくても…。」
前の学校での思い出が脳裏をよぎる。

『いや、行かねば魔法は使えるようにならないし、これから生きていくのが大変じゃぞ？』

(確かに学校は世界を見渡すにはいい場所かもしれない。やはり魔法は使ってみたいし…。それに、この神様は信用できるはずだ。)

「やることもないし。とりあえずあんたの話に乗ってやるよ。」

『それはよかった。』

「だが、学校なんてどうやって入るんだ？」

『そのうちわかるじやろう。ホホホ』

その言葉を最後に目の前が真っ暗になった。

第3話 過去の自分と未来の自分（後書き）

今回は、ちょっと暗めの話でした。

龍一の気持ちを表すのがなかなか難しいです…。

もし、疑問に思う点、変だと思う点がありましたら知らせていただけると幸いです。

第4話 エルヴィス魔法魔術学校（前書き）

なんとか3日連続で投稿できました。

予想していたよりも多くの人に読んでもらって感謝、感謝です。
これからも楽しんで行ってもらえるように頑張ります！

第4話 エルヴィス魔法魔術学校

チュンツ。チュンチュンツ。

龍一が寄り掛かっている壁の近くの門から一人の女性が出てきた。

「あら、こんなところに人が…。服装もそうだけで、黒髪なんて見たことがないわね…。」

つといてその女性は龍一のことをマジマジと観察している。

すると「ふあゝあゝ」といって龍一が目を開けた。

少し慌てた様子の女性だったがすぐに落ち着きを取り戻し

「あなた、編入希望者??」そう聞いてきた。

龍一は寝ぼけながら「ふあい…。」と答えた。

「神様なんか意味深なこと言っていたなあ。…ん。ここは何処だ?」

先程と違いしっかりと目を開けて意識もはっきりしている。

朝になったのだが、目の前の光景がおかしい。

俺は確か外で寝たはずなのに現在、俺はソファアーの上にいる。

そして、目の前に見知らぬ女性がいた。

「あら、起きたわね。ソファーに座った途端、寝ちゃったもの…。」

「ここは何処ですか??」

相手を睨めつけながらそう言って、いつでもディアブロを抜けるようにホルスターに手を置いた。

「あら?覚えてないの??ここは、王立エルヴィス魔法魔術学校の理事長室よ。」

神様が言っていたことはこのことだったのだろうか??と考えていると、

その女性が「それでリユーイチ君は編入希望者でいいのよね?」
と聞いてきた。

「その前に、あなたは誰ですか?」

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は、この学園の理事長メリサ・ビクトリアよ。」

それを聞いて俺はホルスターから手をどかして目の前の紅茶を一口飲んだ。

「それで、リユーイチ君。あなたはこの学校の編入試験を受けるの
ね?」

ちなみに何故名前を知られているかという寝ぼけた俺がしゃべったからだ…。

「はい。」

(先ほどからこの人どこかであった事あるような気がするんだけど…)

「わかったは。じゃあ、早速、試験を始めるわ。」

「はい??」

理事長の言葉に耳を伺った。

「編入試験よ。ついて来て」

いきなり試験だとは思っていなかったのでヤバいと感じ始める龍一だった。

正直、俺は頭はいいほうではない。

それにこの世界に来てまだ1日なので、まったくと言っていいほど知識がない。

歩きながら理事長から試験の簡単な説明を受けた。

この編入試験は学力より、もともとの素質を見るので試験内容は戦闘と魔力測定の結果で理事長自らが判断するものだそうだ。学力試験じゃなくて助かった…。

理事長に連れてこられた場所は闘技場だった。

中世のコロシウムに少し似ているが、もっと近代的な感じで魔力結界が張られているので、よっぽどのことがない限り壊れたりしない。

そこにはすでに一人の男が立っていた。

「さ、準備してね」

理事長はそう俺に言って観客席の1番前に座った。

それを見計らったように男が口を開いた。

「俺は、ザンザスだ。普段は戦闘魔法を中心に教えている。これからお前には俺と戦ってもらおう。」

いかにも戦闘狂といえるような肉体で、目がキラキラしている。

「わかりました。」

そういつてザンザス先生と向かい合った。

2人の間の距離、約10m。

「それじゃあ、用意はいい？」

理事長が俺と先生の顔を交互に見る。

お互いにならずく。

「試合開始！」カーンという音が場内に響き渡った。

彼女が鐘を鳴らすのと同時に俺はディアブロを抜き照準を構えようとした。が、先生の手からいきなり炎の塊が飛んできたのでサイドステップの要領で横に跳ぶ。

すかさず、先生が何やら呪文を唱えると俺との間に炎の壁が出来た。出来上がった炎の壁からは終始、炎の球が飛んでくる。

一旦、状況を確認するために俺はバックステップで後ろに下がる。先生の様子を伺うと炎の壁の隙間から、大規模の魔法を使おうと詠

唱をしている姿が一瞬見えたのでディアブロを両手で構える。

照準を合わせ、トリガーを引いた。

その瞬間、轟音と共に決着は着いた。

俺がトリガーを引くと同時に先生も大規模な魔法を発動した。しかし、ディアブロから放たれた弾は炎の壁を突き破ると8つに分裂しそのまま発動した魔法を打ち砕き先生に衝突した。

まあ、俺の撃った散弾を衝撃が緩和されたとはいえ全弾喰らったのだ、観客席に突っ込んで泡吹いても当然の結果と言えるだろう。

闘技場の上部にある結果ボードに文字が浮かび上がった。

試合時間約1分。

ザンザス × 攻撃回数：3回

リユーチ ○ 攻撃回数：1回

・・・・・・・・（長い沈黙）

「えっ！？勝者リユーチ。」

理事長は啞然として俺とザンザス先生を交互に見る。

（ちょっと待ってよ…。学園一の鬼教師といわれるザンザス先生を一撃で倒すなんて…。しかもさっきの魔力量はいつたい…。）

「このあとどうすればいいんですか？」

突然、龍一に声をかけられ理事長は慌てたのか

「まりやき、あ、魔力測定を行うわ。」
と言った。

（噛んだよな…。）

魔力測定室に向かっている間に理事長から俺は、いくつかの質問を受けていた。

さっきの技とその武器は何なのかという質問に、このセレクターで魔力の塊を撃ち出したのだと言うと理事長はかなり驚いていた。何やら、魔力の塊を打ち出すセレクターは弓矢の形をしたものが一般的だが威力が弱いので使っている人が少ないそうだ…。

それに、セレクターは龍一くらいの歳までは杖の形をしたものを使う場合がほとんどで、ある程度魔法を学んだ時点で自分に合ったものを選ぶのが一般的だそうだ。

そして、魔力測定室と呼ばれる部屋に来た。

中には剣の柄のようなものと鏡が置かれていた。

（なんかハリーポッターの某魔法薬学の教室みたいだな…）

しばらく待っているといかにも魔女ってかんじの女性の人が奥の部

屋から現れて

「話は聞いています。さ、これを握って下さい。そして、剣先をあの鏡に向けてください。」

と剣の柄みたいなのを俺に渡してきた。

よくみると、ガラスの玉のようなものが散りばめられていた。

俺がそれを握ると柄の部分のガラスの玉はすべてがそれぞれが違う色で宝石のように発光し始めるのと同時に、柄から光の刃が伸びていき一つの形ができあがった。

そして、言われた通りに鏡に剣先を向けると鏡の表面が渦を巻き始め、しばらくたつと何やら文字が浮かんできた。

【魔力値】 798400000

【制御力】 30000

【適合属性】 火・水・土・雷・風・氷・光・闇・破・無

柄から手を離し元の場所に置くと剣は形を消しガラス玉も元に戻った。

「……。」「」

誰も何も言わぬまま、時間が過ぎていく。

そして、ついに女性が口を開いた。

「全属性制覇なんて、ありえない……。しかも、この膨大な魔力量は

「いたい…。」

女性は言い終えるとガクガク震えていた。

後で聞いた話だが魔力量のは龍一と同じくらいの歳で高い人で400000、一般的な生徒で180000くらいだそうだ。王族の近衛魔術師隊長ですら800000000だそうだ。そう考えると龍一のはチートというかもはや化け物だ。

理事長室に戻って来るまで二人共、一切会話をしなかった。

そして、俺と理事長が向かい合う形でソファーに腰かけると理事長が静かに話始めた。

「あなたは何者なの?? 伝説の勇者と呼ばれる存在ですらあなたの魔力量から見ればちっぽけなものなのよ。それにすべての属性を使える人間なんて聞いたことがない。」

「俺は橘龍一ただの人間です。ただ、世界でただ一人、神の加護を受けた人間です。」

異世界とかの説明をする気はなかったが、あからさまな嘘を付くのも何故か気が引けた。

「神の加護…。精霊の加護がある者が勇者と呼ばれていたのだから、納得はできるわね…。」

そういつて理事長は黙ってしまった。

とりあえず先程の魔力測定時に疑問に思ったことを聞いてみることにした。

「そういえば、先程の制御力って何ですか??」

「制御力っていうのは使える魔法の限界を表すものよ。いくら魔力があっても制御力が弱ければ使える魔法の種類は限られてくるの。例えば魔力量が300000の人は下級魔法のファイアーボール(制御力5000)を60発同時に飛ばすことができるの。つまり、今のリユーイチ君は魔力は化け物というか伝説のレベルをはるか超えているけれども、使用できる魔法は下級と中級の一部に限られるということ。ちなみに制御力は心の強さのことだから。」

「んじゃあ俺はさつき先生の先生みたいな魔法は一生使えないのか…。」

「そんなこと無いわ。魔力を上げるのは大変だけど制御力は自分の心の強さだからちよつとしたことで上がるわよ。ただ、その上げ方は人によって異なるから何とも言えないのも事実だけだね…。それにあなたのセクターの効果は魔力の塊を撃ち出すものみないだから、こつちを上手く使いこなせばさつきの戦闘みたいに普通の魔法よりも圧倒的に速いスピードでの攻撃することも属性を付属させることもできるはずよ。」

「そうなんですか…。そういえば結局、試験の結果はどうなったの

ですか??」

「ああ、それなら合格よ。ただ、2つ約束してほしいことがあるの
…。」

「何ですか?」

「1つ目は、あなたの魔力のことは他言無用ね。そうしないと、あなたは化け物呼ばれられるだろうから…。
2つ目は魔力の放出量を制限してほしいの。あなたはセレクターを使えば制御力に関係なく膨大なエネルギーを放出することができるから魔力量を抑えてもらわないと大変なことになるだろうから…。
この2つと校則さえ守ってくればあとは自由に生活してもらって構わないわ。」

「約束します。後、学費は、いつまでに払えば…??」

「ああ、学費は免除よ。」

「免除??」

(そんなうまい話はないだろう…)

「あなたはS組。つまり特待生だから学費は気にしなくて平気よ。寮はここを出て右に行っただころにあるわ。」

「他に何か聞きたいことはありませんか??」

「いえ…。」

「じゃあ明日から学校ね。クラスがあるのはあっちの白い建物よ。遅刻しないでね」

そういわれて理事長室を後にした。

（あの理事長、どこか母さんに似ているな。なんか嘘を簡単に見破られそうな気がするし、凄い話しやすかった。そういえば、まとも
に人と話したのは久しぶりだな…）

そんなことを思いながら寮に向かった。

第4話 エルヴィス魔法魔術学校（後書き）

今回は少し戦闘シーン入れてみました。

おかしな点等ありましたら報告お願いします。

これからも徐々に登場人物と用語が出てくると思うので、頃合いを見てまとめを掲載しようと思います。

感想等いただけると嬉しいです！

第5話 初めての学生寮（前書き）

予想よりもはるかに多くの人に読んでいただいているのでとてもうれしく思います！

これからも頑張っていくしますので応援よろしくお願いします。。

第5話 初めての学生寮

「これが寮だと??」

思わず口に出さずにはいらなかった。

外見はどこかの城だし、校内にあるのに頑丈そうな鉄格子の門、天使を模った噴水などのオブジェが複数ある。

門番の兵士に名前を告げると入り口まで案内してくれた。

馬鹿でかい扉が開くとそこにはエントランスホールが広がっていた。天井からは巨大なシャンデリアが吊り下げられ、床は大理石。目の前にはこれでもかかってくらい存在感を放つ階段がある。まるで、どこかの宮殿だなっと思う俺だった。

とりあえず、案内してくれた門番に礼を言い左側にある受付へと向かう。

座っていたのは本物のメイドさんだった。

「新しく、ここに住むことになったんだけど部屋って何処??」

「リ्यूイチ様ですね。只今、ご案内します。」

そう言って、メイドさんに連れられて着いたのは最上階。

ちなみに移動には階段ではなく籠とよばれるエレベーターを使用した。なんでも魔力で動かしてるそうだ…。

籠を降りると目の前にはすぐに、豪華な装飾を施された扉があった。

「こちらの部屋になります。」

そういつてメイドさんが扉を開けてくれた。

部屋に足を踏み入れた瞬間の感想。

「は？」

メイドさんが驚愕したようで「お気に召しませんか？」と尋ねてきたので

「いや、大満足だ。」

と答えておいた。

「そうですか。何かご用がありましたらこちらのボタンを押してください。」

そういつてメイドさんは部屋を出て行った。

なぜ、俺が咄嗟に声が出たのだった？

それは、この部屋自体に呆れたからだ。

一人で住むのに6LDKも必要か？

寝室に天蓋付きのベットはあるわ、リビングにシャンデリアぶら下がってるわ、衣装室があるわっと突っ込み処満載なのだ…。

日本の学生寮に住む、貧乏学生に自慢したら死刑確定だろう…。

部屋にいても特にやること無いし、何より落ち着かないのでエントランスホールに戻ってみることにした。

ちなみに部屋の鍵は俺の魔力を認識して開閉するという、現代の指紋認証に似ているシステムを使っていた。

どこに行こうか迷ったが腹ごしらえが先だと決心し、食堂で遅めの昼食を取ることにした。

まあ、食堂もとんでもなく豪華だったが、他の場所に比べれば質素だった。

イメージとしては高級レストランって感じだ。

食事は食堂で食べることも、ルームサービスを頼むこともできるそうだ。(もちろん無料。)

俺が、四人掛けのテーブル席に着くとメイドさんがメニューを持ってきた。

スパゲティを頼み、辺りを見渡す。

今の時間帯は俺以外に誰もいないので貸し切り状態だ。

出されたスパゲティをぺろりと完食し、食堂を後にした。
何処にいか迷っていると受付にいるメイドさんが俺のところにやってきて、『至急、理事長室に来てほしい』というメモ書きを俺に渡してきたので、再び理事長室に向かった。

「それで、何の用でしょうか??」

2時間ほどまえに来た理事長室のソファに腰掛けながら俺は理事長の様子を伺った。

「何点かやらなくちゃいけないこと忘れてたので…」

(おいおい…)

「まずは制服のサイズ測らしてもらいます」

理事長がそういうと同時に扉が開き二人の女性が入ってきた。

(こういうおっちょこちょいなところも母さんに似ているなあ)

など考えていると二人の女性がメジャーを持って俺のすぐ脇に立っていた。

「それでは、失礼します。」とって二人掛かりでサイズを測っていく。

恥ずかしい…。

理事長の視線もなんか嫌だし、好きでも無い女性にペタペタ触られるものなんか嫌だと思っ俺だった…。

「後であなたの部屋の衣装室に入れておくわ。ちなみにS組は、他

のクラスとはデザインが違っからね。」
二人の女性が部屋から出て行くのを見送った後、理事長が説明してくれた。

「他にも何かやるんですか??」

「リユーイチ君、ギルドカードって持ってる??」

「いえ、持っていませんが…」

そもそも国にギルドがあることさえ知らない龍一だった。

「なら早速作りましょう。この学園では、ギルドカードが身分証になるからね。」

そういつて一枚の紙を俺に渡す。

紙の上部には誓約書とかかれており最後にサインを書くところがある。

「あ、ここにサイン書いて」

理事長が枠で囲まれた部分を指差した。

ちなみに、俺がこの国の言葉や文字は普通の日本語感覚で書いたり話したりしているが、実際話してる言葉や文字は日本語とは大きく異なる。

「じゃあ、その紙を寮の右脇の受付の人に渡してね。リユーイチ君はS組だからギルドランクはCからよ。」

「わかりました。ところで授業で使う教材ってどうするんですか？」

「教材も何もS組は今年はギルドの依頼や実戦的な戦闘訓練が中心だと思っわ。だから教材は無し。必要があればその都度配付するわ。」

それを聞いて勉強嫌いな俺はどこか救われたような気分になった。

「あ、後言い忘れてたけどS組は各学年5人しかいないから。まあ貴方が来てくれたお陰で助かったわ。今まで3年生はS組がずっと4人だったからね。」

「そうなんですか。なぜ4人なんですか？？」

「それは、最後の一人。つまり学年5位の生徒の性格に問題があったのと、私が魅力を感じなかったからよ。」

（勝手な理由だな……。）
と内心想いつつ、明日から俺はS組の人達と上手くやっていけるか不安になった。

また、利用されたり騙されたりしないように心がけようと決心した俺だった。

「他に何か質問はある??？」

「いいえ。」

「じゃあ、今度こそ入学おめでとう!!明日からの授業も頑張って

ね。」

そう言いながら理事長は俺を部屋から送り出した。

寮に戻ってきた俺は言われた通り入って右側にある受付に向かった。先程の紙を受付係（ヘレンさんと言っらしい）に渡した。

するとカウンターのしたで何やらゴソゴソとした後

「では、こちらがギルドカードとメルリングです。ギルドカードは身分証になるので無くさないで下さい。再発行には手数料がかかりますので…。そして、こちらのメルリングは、ギルドランクによってデザインが異なり、君でいるパーティーの情報や念話をする事が出来ます。非常に高価なもので紛失しないようにしてください。何か質問はありますか?？」

「ギルドランクを上げるにどうしたらいいんだ??」

「ギルドランクは自分の同じランクを20回、一つ上を10回、二つ上を5回こなすとランクが一つ上がります。Sランク以上を受けられる場合はS以上のランク者以外、自分のランクに関わらず一つ上がります。ちなみに、ランクはSSS、SS、S、A、B、C、D、E、Fまであります。」

「なるほどね」

「依頼の仕方は、受付つまりここでギルドカードを提示して希望するランクを言っただければ、その時に来ている依頼を受けることが出来ます。なお、ここはS組専用の掲示板なので難度の高い依頼がほとんどです。依頼は複数同時に受けることは出来ません。ま

た、失敗した場合は報酬の十分の一をギルドに支払ってもらいますので自分のレベルにあった依頼を受けてください。」

とても丁寧に説明してくれたヘレンさんにお礼を言い自分の部屋に戻った。

さっそくメルリングを中指に着けた。リングの中心にある宝石がわずかに輝いて俺のことを認識したようだ。ギルドカードのほうを見ると所属の部分が【エルヴィス魔法魔術学校 3年S組】となっておりここの生徒であることを証明している。

とりあえず夕食までは、まだ時間があるので書斎にある魔術書を呼んでみることにした。

俺は、本棚にあった一冊の魔術書を開いた。

『基礎から始める魔法入門』それがこの本のタイトル。
(なんか、日本にも参考書売り場行くとこんな感じの置いてあるよなあ〜)

ざっと読んだ内容はこんな感じ

- ・そもそも魔法とは自然の力を使った奇跡のことである。
- ・使える属性は1〜4つが限界だとされとている。
- ・魔法の威力は魔力、制御力、詠唱内容によって決まる。

- ・属性魔法は使用魔力が大きい。
- ・詠唱で魔法の効果を設定することができる。
- ・詠唱破棄は威力や正確性は落ちるが発動速度が非常に速い。

簡単でわかりやすい上知らなかった知識が結構書いてあった。

「だいたい、ゲームと同じだけど詠唱はもっと詳しく学ぶ必要がありそうだな…。」

特に気になった属性魔法を強くする練習方法が簡単に書いてあったので少し実践してみることにした

まず指先からそれぞれの属性を放出するイメージで魔力を搾り出した。

最初は一瞬光って消えるだけだったが、1時間くらいやっていると親指が赤色、人差し指が青色、中指が黄色というようにすべての指が違う色に輝き出すまで成長した。

「うまくいったなあ。これディアプロに応用したらなかなか使えるかも…」

実はこれ、めちゃくちゃ凄いいことのようにだが龍一は知るよしもなかった。

そうこうしているうちに3時間ほど時間が経ったので食事を取るこ

とにした。

今回は部屋まで食事を持ってきてもらうことにした。メニューは『
にゅ〜めん』。

なんか、気になったので頼んでみたのだが…。

「こちらが『にゅ〜めん』でございます。」とってメイドさんが、
机においたのは…

「…ラーメンじゃん!！」

メイドさんが、一瞬ビクツとした後、逃げるように部屋から出てい
った。

味は塩ラーメンとほぼ同じでなかなか美味かった。

まさか、異世界でラーメンが食えるとは思っていなかったなので軽い
感動を覚えた。

「とりあえず明日から学校だし、風呂入ってさっさと寝よう…。」

そうして静かな夜が過ぎていくのだった。

第5話 初めての学生寮（後書き）

一応、次回から学園編に入る予定です。
誤字脱字、感想等ありましたらよろしくお願いします。

第6話 新しいクラス（前書き）

なんとか、6日連続投稿できました。
内容が薄くならないように何度もチェックしていますがもし気になる点があったら意見ください。

第6話 新しいクラス

「ふあゝあゝ」

大げさとも言えるくらいのおくびをしてベットから起き上がる。

昨日はあんなに早く寝たのだがベットがあまりにも広すぎるので逆に落ち着いて寝られなかった。

朝シャワーという元の世界じゃ絶対にやらなかったことをやり、衣装室に向かう。

昨日のうちに持ってきてくれたのか制服が置いてあったので早速手を通す。

デザインは確かにかっこいい。

白を基調とし淵は金色な日本では100%お目にかからない制服だった。しいて言うなら宝塚と歌劇団で貴族役が着ているような感じの物だ。176?の平均的な身長の俺だが黒髪が意外とマッチしているので驚いた。腰にホルスターをつけると海軍のようにも見えた。胸の部分にS組の証である模様が刺繍されている。

剣と杖が交差し、そのまわりを10属性を示す小さな魔石10個が囲むという模様で俺は結構気に入った。

メイドさんに朝食を持ってきてもらった。今朝のメニューはフレンチトースト。どうやらこの世界の食生活は現代とあまり変わらないようだ。

食事中に何時か黄色い歓声が聞こえたが気のせいだろう…。

食事を終えて、リビングに置かれた柱時計を確認し部屋を出た。寮を出るときは何故か誰にも会わなかった。

しかし…

寮を出て門までの一直線の道を歩いてる最中に俺は異変に気づいた。

門の外には自分とは違った制服の生徒達がひしめいているのだ。耳を澄ましてみると…

「あれが、幻の5人目…」

「本当に黒髪だ。」

「腰につけてるの何だろう…」

「瞳も黒だ…」

「どれくらい強いんだろう…」

「かっこいいかも…」

「平民風情が調子乗りやがって。」

など罵声＋歓声が聞こえてきた。

(どこの漫画の世界だよ…)

実はこのS組は美男美女が多いため登校している姿を見ようと人が集まって来るのだ…。

昨日は、まだ里帰りしていた生徒がほとんどだったことと、制服を来ていなかったため誰の目にも止まらなかったが今は違う。

しかし、そんな目線も普通の男子なら多少なりとも喜ぶところだが俺はかなり不機嫌だった。

（こいつらは人間を外からしか見てない連中だ…。S組の自分に将来のために媚でも売ろうつてか。まあ、違つやつも結構いるみたいだけど…。結局、どこの世界も変わらないな）と考えているのだった。

大部分の生徒が長らく空席だった3年S組の新たなメンツに興味津々って感じだが、龍一には利用しようと企んでるやつがほとんどのように見えていた。

門を抜けても人だけがあるからここを通るのはしんどそうだなと立ち止まると門が開き、一気に人の波が俺に向かってきた。

門番の兵士も困った顔をしているがとめる術はない。俺は、一気に囲まれて質問責めに合い、さらには体を触ってくるやつもいたためかなりイライラしてきた。

そんな中、いかにも貴族つてかんじの集団が近づいてきた。

「どんなコネを使つたんだい?」

「平民が来る場所じゃないよ…。」

「君はどこ出身? 僕はあの名門貴族ラ…」

「金やるからさ、俺のパシリに…」

など言いながら気安く肩など叩いてきた。

まだ遅刻する時間でもないが、このままここにいるのもバカらしい…。

しかし、その集団の1人が「こいつ、利用すればさあ…。」と言って

いるのが聞こえ
『利用』という言葉に反応した俺はホルスターからディアブロを抜いた。

本当は言った本人ごと吹き飛ばしたいが問題になるのもめんどくさいので空にむけてトリガーを引いた。

弾は空砲にしたが音量は普段の発射音より遥かに大きい。

とてつもない轟音と風圧で俺を取り囲んでいたギャラリィがピタッと黙ってしまった。

「邪魔だからどいて。」俺がそういつとさつと人垣が二つにわかれ道ができる。

まるでモーセの十戒のようだ…。

周りの生徒は静まり返ったまま、龍一がS組専用校舎へ入っていくのを見守った。

貴族っぽい集団は耳と目をふさいで地面に伏していた。

(いい気味だ。)

そして、俺は理事長に言われた白い建物とやらに着いた。

ほかの校舎に比べると圧倒的に豪華なこの建物に入ると当たり前のようにあるシャンデリアと床に描かれた何かの模様が目に入る。

床に書かれた三角形にはそれぞれ数字がかかれておりその先には頑丈そうな扉がある。

どうやら学年が書かれているらしい。

入口の扉のちょうど正面に位置する大きく【?】とかかれた扉を開けると談話室のような場所だった。

赤色ソファーと暖炉、魔術書が所狭しとならんでいる本棚、水晶が置かれている戸棚。

そして、奥にあるテーブルで4人の学生たちが紅茶を飲んでいるが見えた。

別に俺は人見知りをするわけではないが後でどうせ自己紹介するだろうと思ひ、目の前にある高級そうな赤色のソファーにどつぷりと座る。

その様子に1人の子が気づいたようでほかの人たちに何やら話すとこちらに向かってきた。

「お前が新入りか。よくも俺のハーレムを崩しやがって。」

と金髪のイケメン野郎が目の前のソファーに座りながら言う

「誰がお前のハーレムなんだよ！」

とすかさず気の強そうな赤髪の女の子が野郎を殴る。

(ベタなパターンだな…。)

「イテテ。んじゃ、改めて。俺の名前はライナ・エレオン。エレオン家の次期当主、得意属性は火でセレクターはこいつだ。

そいつって脇に立てかけてあった剣を取った途端に、剣自体が炎に包まれた。

「俺の剣タイプのセレクター、バスターブレイドだ。」

こいつは、この口調さえなくて黙っていればモテモテ間違えないだろうな…。

（後で知ったのだが、S組以外とはほとんどしゃべらないのでファンクラブも存在するくらいのモテ具合らしい…）

「すごいなあ…」

素直に感心した俺に満足したのかなぜかウィンクしてきた。

そこに先程ライナを殴っていた女の子がやって来て自己紹介をはじめた。

「じゃああたしの番ね。初めてまして。あたしはケイト・オレオン。父は王国魔法騎士団の団長をやってるの。得意属性は雷だよ！セクターはこれ。」

そういいながら腰にあったサーベルを前に構えると剣先から電気が放電しパチパチと音を立てた。

「サーベルタイプのセクターで、レイピアって言うの！」
見た目はかなり小柄で、胸は将来に期待…って感じだがかわいい系では人気がありそうだ。

他の二人も自己紹介をしようとした途端、そこに先生が入ってきた。（っといつても教卓があるわけではないので俺の目の前のソファ―に腰掛けるのだが…）
そして、そこにはザンザス先生がいた。

「ああ」。既に自己紹介したのかもしれんが一応言っとくぞ、転校生のリユーイチ・タチバナだ。なんか、いろいろな事情でこの学園に入ることになったらしい。強さは、俺を一撃でぶっ倒すくらいだからなかなかあると思うぞ。」

ザンザス先生がそういった瞬間、場の空気が重くなった気がした。

「ちなみに、俺の攻撃は掠りもしなかったがな…。まあ、一年間よろしくな。」

昨日のことを思い出して少し嫌な顔をしながらザンザス先生が話し終えると皆はかなり驚いているようだ。その反応を見ている限りザンザス先生は相当なやり手らしい…。

「とりあえず今日はやることないし自由行動な。」

そういつてザンザス先生は何故か俺に向かってウィンクしていった…。

(ウィンクって難くね?)

そこに「お前、リユーイチっていうのか、ザンザス先生倒すなんてすげえなあ〜。」と目をキラキラさせながらライナが話しかけてきた。

(こいつは悪いやつじゃなさそうだけど…)
なーんてことを考えていると先程、自己紹介出来なかった二人がやってきた。

「私はニーナ・フロスガー。得意属性は風でセレクターはこの刀だ。」
そういつて俺に見せた日本刀に比べると少し短い刀だった。

少し、気難しそうな感じだが長い青髪を後ろで縛っており大和撫子って感じだ。

「じゃあ最後は私ね。私はエレナ・ブリティンよ。得意魔法は、水・氷。セレクターは杖よ。」

そういつて見せたのは長さ30cmくらいある杖。

俺は杖つてもつと長いものだと思っていたのでちょっと驚いた。

この人は…美少女だ。学園に来る途中にあった女の子といい勝負なスタイルで完璧というかなんというか…。ファンクラブとかありそう…。

最後は俺の番らしい。前の世界のやつらに比べると少しはマシかもしれないが、まだ信用するには早すぎると判断し自分が異世界から来たことは伏せておくことにした。

「さっき紹介されたがもう一度言っておく。俺の名前はリユーイチ・タチバナ。両親を含め家族と呼べる人はいない。得意属性は特になし。武器はこのディアブロだ。」

俺もさつき皆がやってくれたようにディアブロを見せた。

「なんだこのセレクター？初めてみるタイプだな…。刃もないしどうやって使うんだ？？それに得意属性が無いってどういうことだ？ライナがそう聞いてくると皆興味があるようで頷いている。」

(どこの世界でも転校生は注目の的らしい…)

「使い方は後で見せるよ。属性魔法っていうのはよくわからないんだ…。こういうことは出来るけどさあ…。」

お手あげってポーズを取りながら10本の指にそれぞれの属性の光を出す。

「」「」「」「」「」

「どうした??」

皆が急に黙ってしまったので慌てて俺が聞くと

エレナが口を開いた

「リユーイチ、全属性の魔法使えるの??」

「みただけど属性魔法の存在知ったの最近だから…試したこと無い。」

「な…!!」

エレナを含め全員が絶句した。

最初は、なぜ皆がそんなに驚くのがわからないが昨日読んだ魔法書を思い出した。

『属性は多くても3・4種類が限界』

（はあ…。やらかしたな。これは友達どころか化け物扱いかもな…。）

そう思いソファから立ち上がろうとしたら「凄げえ…。凄げえよリユーイチ!!」ライナが俺の手を握って飛び跳ねた。

「さすが幻の5人目。理事長が気に入ったのも納得いけるね!!」

ケイトも興奮しているようだ。

そんな二人を横目にニーナがニコツと笑い、「エルヴィス魔法魔術学園へようこそ」っと言いなから手を差し延べた。

俺もそれに応じ笑顔を見せた。

「おまえ笑うと意外とかわいいなあ」と言ったライナを俺は軽く叩き、その反応を見ながらまた笑った。

(このメンバーなら上手くやっていけるかも…。)
そんなことを考えている俺だった。

そんな様子を神様は『よしよし』と見ているのだった。

第6話 新しいクラス（後書き）

やっと、学園編突入です。

新たな登場人物がこれからもチヨコチヨコ出てくるので、もうしばらくしたら「世界観まとめ」と「人物まとめ」作りますので参考にしてください。

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

第7話 仲間とは？（前書き）

昨日は投稿できませんでした。

理由はネタが思いつかなかったというのが表向きな理由で、実際は『海猿』見てました。

ではどうぞ^^^

第7話 仲間とは？

朝のやり取りの後、色々と話しているうちにいつの間にか昼時になつていた。

とりあえず食事を取ることにした俺達は一旦、寮に戻った。寮の食堂で俺達はメイドさんに思い思いのメニューを頼み、今は食後のコーヒーを飲んでいる。

「……っということはリユーイチはまともに魔法を使ったことが無いのね??」
隣に座っているエレナが俺に確認するように言ってきた。

「うん。自分が魔法使えるのがわかったのも最近だしね……」

一応、異世界から来たと言っても信じてもらえないだろうから両親を亡くして、今までずっと孤児院で生活していたということにしたので知識が無いことを責める者はいない。エレナの問いに頷いて答えると

「じゃあ午後は特訓だな。」すかさずライナが会話に入ってくる。

「特訓??」

「そう。短期集中でガーンと魔法使いこなせるようになるうぜ。」
そう言っただけでガッツポーズをした。

俺も悪い気はしなかったし、面白そうだったので頼むことにした。

「じゃあお願いしようかな。」

ケイトが近くのメイドさんにその旨を伝えると、違うメイドさんが直ぐに許可書を持ってきてくれた。

俺らはコーヒを飲み終わると、昨日来た闘技場に向かった。

ザンザス先生が突っ込んだ客席は既に直っていた。

そして観客が誰もいない巨大な闘技場の中心に俺ら5人は立った。

先生はエレナ。セレクターが杖なだけにS組の中で2番目に魔力量が多く魔法も得意なため適任だろうということになったからだ。

ちなみに、他の4人は模擬戦をしている。

今は、ケイトVSライナの試合中でセレクターがバスターブレードとレイピアなので圧倒的にケイトが不利の試合だが、ケイトの俊敏な動きにバスターブレードのスピードはついていけないみたい。

当初の予定通り、俺とエレナ2人だけで練習することになった。

「んじゃありユーイチ。基本から確認するよ！」

「よろしく。」

やはり同年代の特に女子と二人きりになると前の世界でのことを思い出してしまう…。それでも、魔法は使えるようになりたいので我

慢することにした。その上、エレナが美少女であるということもあり、かなり緊張している俺だった…。

そんな俺の様子に気付くことなく早速エレナは話し始めた。

「魔法は、この世の奇跡と言われているように様々な物に干渉して発動する能力なのは知ってるわよね？」

「ああ。」

昨日読んだ本を思い出しながら俺が答える。

「魔法には下級魔法、中級魔法、上級魔法、精霊魔法、神聖魔法、創成魔法があるの。一般的な魔法も属性魔法も制御力によって分類されてるの。魔力量によって発動回数、威力などは変わって来るけど使用魔法のレベルは制御力で決まると思っ。リユーイチは魔力量は私よりも多いけど制御力は平均より少ししただから使えるレベルは下級と中級だね。」

（理事長からもだいたいは聞いていたがエレナの詳しい説明のおかげで助かったな…。車で例えればあれだ、魔力量はタンクの量。制御力は馬力つてとこか。んで発動する魔法が車本体って感じだな…。）
など納得しているとエレナが覗きこんできた。

「ちゃんと聞いている??？」

「聞いてます!!!!」

顔が近づいてきて少し驚いたが平静を装って答える。

「んじゃあ続けるよ。属性魔法も含めてすべての魔法を発動するには詠唱が必要な。だけど下級魔法や魔力を込めるだけなら詠唱はいらないの。ライナのバスターブレイドなんかがそうだね。さらに、レベルの高い魔術師なら中級くらいまでは詠唱放棄することができの。本来、詠唱っていうのは魔法を発動するにあたり世界そのものに宣言するものだから技名だけ言えばいいんだけど、様々な設定をするのにもどうしても長くなっちゃうの。」

「なんか複雑だなあ…。」

「そうね。実際に見たほうが早いでしょう。この下級魔法ファイヤーボールを使うのに『ファイヤーボール』と技名だけでも使えるけど…」

そついいながら杖の先に拳大の炎を点し先的に当てた。

「これが技名だけね。次は詠唱するよ。『炎よ、我に力を貸し火の玉となさん。』」

そういつて先ほどの5倍くらいありそうな炎の玉が杖先に現れた。そして、杖を一振りし目の前に当てた。

先ほどの的の一部が黒く焦げただけだったが今回は的ごと吹き飛んだ。

「全然違っただなあ…」

「まあね。詠唱でさらに付加効果もつけることもできるし数を増やすこともできるの。詠唱しなくても心の中で軌道を制御できれば詠

唱も技名もいらずに発動できる詠唱破棄ができるの。詠唱がいらない分、起動が早いのが特徴ね。」

「とりあえずやってみるか」

「そうね。じゃあさっきの詠唱ありでやってみて。」

「じゃあいくぞ。」

(ちよつとアレンジしてみるか)

『炎よ、我に数多の力を貸し幾千の炎の玉となさん。ファイアーボール!!』

そういいながら体の内から力を使う感じのイメージで、ディアブロを右手に持ち左手を前に突き出した。

その瞬間、慌てたエレナが何やら叫んでいた。

そして、闘技場に現れた数千、数万の炎の玉。一つ一つのサイズは拳大でもこれだけの数になると迫力も熱量も凄まじい。

「上手くいったなあ〜」

炎を眺めながら俺が言っていると

エレナがちよつと怒った様子で

「これのどこがファイアーボールなのよ!!」

「いや、さっき言ったエレナの詠唱にアレンジ加えただけなんだが??」

「これが、ファイアーボール??」ドーム状に覆われた結界のようになっている炎を見ながらエレナが唾然としている。

「なんだなんだ!!」ライナが俺の元にくるなり聞いてきた。他の3人も聞きたいのだろう、頻りに頷いている。

「いや、ファイヤーボールを大量に出してみたただけだよ?」
ほらっといって左手を下ろした。

次の瞬間、的に向かってすべての炎の玉が飛んできた。

慌てたのエレナが『大気の水よ。我等を守りて、水の壁を成せ。ア
イスバーグ!!』と言ったのと同時にニーナも『風よ。我等を包み
て、壁と成せ。ウインドウォール!』と唱えた。

水と風の二重結界によって俺らは無傷だったが、闘技場に貼られていた結界には輝が入り、地面には無数の穴があいていた。

「危なかった…。」

ニーナがほっとしたように呟いた。

「リユーイチ。」

エレナがかなり怒った様子で俺に近づいてきた。

「わりい…。あんな威力あるとは思わなかった。」

「まあ、説明しなかった私も悪いんですが…。リユーイチは私よりも圧倒的な魔力量を誇るようなので、たとえ下級魔法でも魔力を注ぎすぎるとこのようなことになります。これからは魔力の出力に気

をつけてください。」

「やっぱり注ぎすぎたか…。自分の魔力の5分の1でこの威力とは…。」

「でも、リユーイチはとてつもない才能あると思うよ!!」ケイトが横から口をだしてきた。

「そうだな。下級魔法で上級魔法二段階の結界に輝を入れるなんて…。」ニーナも納得しているようだ。

その後は大変だった。理事長が慌ててやってきて結界を修復するように教員達に指示を出し、俺たち5人を理事長室に呼び出した。野次馬に集まった生徒は幸いいなかったが後々、様々な噂がたった。

とりあえず俺たちは理事長室に行ったが、まだ理事長は戻ってきていなかった。なので紅茶を飲んで待つことにした。10分くらい経つと一通り作業が終わったらしく理事長が部屋に戻ってきた。そのまま俺の向かい側の席に座り、ゆっくり話始めた。

「リユーイチ君。あれほど抑えてって言ったの忘れたの。言ったの昨日よ??」

「いや忘れていませんよ?威力も5分の1くらいに抑えてましたし…。あつ…。」

(確か、魔力量のこと黙っておく約束だったような…。)

「『『『あれで、抑えたの！！！！』』』」

予想通り、後ろにはメチャクチャ驚いている4人がいた。

理事長も深くため息をついて言った。

「もう、隠せないわね……。っというか隠す暇もなかったみたいだけどね……。彼の魔力量はみんなよりちょっと大きいどころか、人間のレベルを超えてるの。あなたたち全員の魔力の数十倍くらいかしら。」

今度は誰も口を開かない。

(さらば、楽しい学園生活。)

そんな時、エレナは一人考えていた。

(リユーイチの力を借りればお父様も私のことを認めてくれるかもしれない。でも、それはリユーイチをただの物としか見てない気がする……。)

エレナは何かを決心したように理事長のほうを向いた。

「リユーイチはどこかのクランに属していますか??」

「先日ギルドカードを発行したばかりだから入っていないはずよ？」

「理事長。確か、3年生からはギルドの依頼を正式に受けてもいいんですよね??」

「そうね。去年までは私達が決めた依頼の中から選んで行っていたけど今年からは自由に受けて平気よ。それがどうかした??」

エレナがすっーと息を吸い込み良く通る声で言った。

「理事長。クラン結成してもいいですか??」

「えっ」

と言ってケイトやニーナもお互いの顔を見合わす。

宣言したエレナが皆のほうを振り返ると、ケイト・ライナ・ニーナが静かに頷き、最後に全員で俺のほうを向いた。

「リユーイチ。私達と一緒に高みを目指さない??私はある目的のために、結果を残さなくちゃいけないの。でも、それは一人の力じやどうにもならなくて…。だから、あなたの力を貸してくれない??あなたがこのクランには、必要なの!!」

初めてみるエレナの表情だった。

「これからクランとして活動していけば命の危機に晒されることがあるだろう。だが、君を含めここにいる仲間ならそれぞれ背中を預けられると預けられると思うぞ。」

ニーナが静かに語ると、

ケイトも便乗して

「だね。リユーイチはもうSクラスの一員。外れるというのは無しだよ??」っと言ってきたし、

ライナは「リユーイチ！俺ら二人でこの三人を幸せにするって誓っただろう??」と言ってきた。

(皆の言葉を聞いていると、何か温かいものを感じる。自分は利用されるだけのただの駒じゃなかったのか？仲間??今までは何があっても一人でなんとかやってきた。だけど、二ーナの言うとおりのクラスの人なら信じて大丈夫かもしれない。だって…何かを頼まれるときにこんなに言葉に込められた想いの重さが伝わって来ることなんてなかった。でも、この気持ちはなんだ??わからない。わからない。)

神様の言葉を思い出した『相手の目を見る。』
皆はどうみても嘘をついている目じゃない。これは真剣に俺自身を見ている目だ。

それにまだ、出会って一日も経っていないのにこんな感情が芽生える仲間は初めてだ…。

これが本当の仲間なのかもしれない…。

(わかったよ神様。少しは人を信じてみるさ。)

「もちろん。俺もクランに入れてくれ。」
そう言った瞬間、パツとみんなが笑顔になった。

(そうだ。初めて人に感謝されたときもこんな感覚だった。こいつらと一緒にいたら、少しは昔の自分に戻れるかな……??)

そんな様子を見ていた理事長がわざとらしく咳ばらいをした。

「完全に私のこと忘れてるわね……。どちらにしろ明後日には案内が配られるはずだったから別に構わないわ。リユーチ君もいるから最初から説明するわね。クランっていうのは、同じような志をもった者達が集まりギルドの依頼をこなしたり、王国の任務を受けたりする軍団のことよ。」

「なるほど……。」

「それで、リーダーはどうするの??？」
皆は一斉にお互いに顔を見合わせる。

「ライナがいいと想います。」俺はすかさず言った。

「あたしはリユーチがいいと思ったんだけど……。」そうエレナが言ってきたので俺は首を振った。

「俺はリーダーってキャラじゃないしあまりにも無知すぎる。それ

に比べてライナは適任だろ。「まあ、ライナはもともと皆と仲間だったしなかなかの実力者らしい。そのため、みんなも納得してくれたいだ。

その様子を見ていた理事長が頷き

「では、ライナをリーダーとしましょう。克蘭名はどうするの?」

「ここはリーダーに決めてもらおう。」

そう言っつてニーナがライナのほうを向く。

「俺かよ…。そうだなあ…『S・A』ってのはどうだ?? S組のAngel達っつてことで!」

「Salvation Armyか…。」俺がボソツと呟くと
「何それ??」っとケイトが興味津々っつて感じに聞いてきた。

「Salvation Armyっつていうのは俺のいた地域の言葉で救世軍っつて意味だよ。」異世界っつていうのがバレないよう上手くごまかしながら言っつた。

「救世軍かあゝなんかいいねえ!」

ケイトも納得したようだ。

ライナの考えた意味とは違っつが『S・A』という名は俺も結構気に入っつた。

「じゃあ理事長『S・A』でお願いします。」

「わかったわ。登録するからメルリング出して。」
そう言っただけなら手は理事長のほうに出した。

「ここにクラン『S・A』の結成を承認します。」

そう言っただけで指をパチンツと鳴らすとメルリングの中心の宝石が緑色となると同時に表面に『S・A』という文字が浮かび上がってきた。

「すごいなあ……。」

俺を含め全員驚いている。

「これは、クランのランクを表しているの低い方から緑 黄 青 赤 紫 金 虹となっているの。まあ、金は王家が認めたクランに与えられるもので今は、『ヴァルディア』というクランが金だ。」
理事長の言葉にエリナ表情が一瞬曇ったような気がした。

「ランクは熟したギルドの依頼の量。各種の大会の成績によって上げることができる。ただ、犯罪行為などによって下がる場合もあるから気をつけて。クランの人数は増やすことはリーダーか副リーダーがメルリング同士を接触させ、『加入を許可する』といえれば出来るからね。」

全員頷いた。

そして、ここにクラン『S・A』が誕生したのだった。

第7話 仲間とは？（後書き）

今回はちょっと海猿の影響を受けた気がします。
友情を描くのはなかなか難しい…。

誤字、脱字、おかしな表現等の報告あればお願いします。
感想もどんどんお待ちしています^^

まだまだ、未熟者なのにこんなに多くの人に読んでもらっていること
に感謝、感謝です。

第8話 日常の始まり（前書き）

投稿始めて1週間経ちました。

こんなにもたくさんの人に読んでもらえて光栄です。

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします。

第8話 日常の始まり

「ふあゝああ」

ほとんどの男子学生が朝に弱いのは当たり前だろう。

俺もその一人だ。

昨日はクラン結成パーティーだというライナの提案により、夜遅くまでさわいでいたからなおさらだ。

今、俺が住んでるこの寮は生徒15人に対してスタッフ80人という人材を割いている。

そのためメイドさんが色々な世話をしてくれるのでとても助かっているんだが、やはりどうも慣れない…。

目を覚まそうと朝シャワーを浴びながらふと夢のことを思い出す。

それは、彼女との夢だった。

〳〳3年前〳〳

4月それは出会いの季節。新たな始まりを感じる日。俺は期待を胸に新しい学校の校門をくぐった。

中学は男子校だったせいで彼女など出来るはずもなく高校生活に淡い期待している俺だった。

だが入学式の後、俺はいきなり現実を思い知らされる。クラスに入ると皆、仲良く話したりしていた。しかし、それは同じ中学出身の子達同士でだった。

俺はこの学校には1人も知り合いがなかった。俺の席の周りには誰もおらず一人窓の外を眺めていた。高校初めてのホームルームなんかもあるという間に終わり、気づいたら放課後だった。

(入学式の日友達一人もできないなんて…)
そう考えながら机に伏していると突然、背筋にヒヤツとした感覚が伝わってきた。

「ひっ!」
慌てた俺が小さく悲鳴を上げると後ろからクスクス笑う声が聞こえた。

「あ、ごめん。なんか悲しそうな顔してたから気になって…。」
振り返るとそこには黒髪のちょっと気の強そうな女の子が立っていた。

「いやあ…。ちょっと驚いただけだから。」

（俺のことに気づいてくれるなんてなんかうれしいな。）

「あれでちよつと??」必死に笑いを堪えてるのがバレバレだ。

「私は、井上彩花。あなたは??」

「俺は、橘龍一。」

こうして俺らは出会ったのだ…。

俺と彼女は気が合ったことと家が近かったことであつという間に仲良くなった。

周りに付き合っているかと思わせるほどに…。

そんなある日、いつもの喫茶店で勉強を教え合っている時に彼女がいつになく悲しそうな顔をしていることに気がついた。

理由を聞くと家族関係がうまくいっていないらしい…。

その話をしているときの雰囲気はいつもの気の強いイメージとは異なり触っただけで壊れてしまいそうだった。

（彼女を守ってあげたい。彼女の側にいたい。）
生まれて初めて俺は強くそう感じた。

彼女に告白を決意したのは出会ってから3年後、つまり今年だ。

『好き』と伝えたらこの関係が崩れてしまうのではないか…。そう恐れていた俺だが、他の人に取られたくないって想いが徐々に強くなっていき我慢できなくなったのだ…。

告白自体が初めてだった俺はメチャクチャ緊張して、噛みまくったのでお世辞にもカッコイイ告白とは言えなかった。

だが、そんな俺の告白を彼女は受け入れてくれたのだ…。

パンツパンツと自分の頬を叩いて気を引き締める。

「あれは、もう過ぎたことだ今の俺には関係ない。」

そう自分に言い聞かせリビングに戻った。

メイドさんに持ってきてもらった朝食を済ませ、エントランスホールに向かう。

そこには、3年S組のメンツが揃っていた。

「遅いぞリユーイチ!!」

(そういえば、初めて龍一と呼んでくれたのも彼女だったな…。)

「悪い。朝飯ゆっくり食い過ぎた。」

(でも、これが今の日常だ。)

「あゝあ。もうギャラリー集まっちゃったよ…。」
ケイトがそう言いながら窓の外を見ていた。

彼女が向いた先を見ると、昨日と同じように人垣ができていた。

「そういえば、リユーイチは初めてか？あれは、俺のかわいい子猫ちゃん達だ。」

そう言ったライナに呆れながらニーナが呟く。

「こいつは喋らなければなかなかのイケメンだから人気あるんだよ…。後はエレナが凄い人気だ。」

「そつでもないわよ…。」

エレナが明らかに照れながら答える。

「そういえば、リユーイチは昨日あの人垣どうやって突破したの？」

ケイトが目線をこちらに戻しながら聞いてきた。

「なんていうか…。強行突破??」

「はい??」

ライナが明らかに不思議そうな顔で俺のほうを見てくる。

「まあ、とりあえず遅刻しちゃうから行きましょ。」

そうして俺らは寮の正門に向かって歩きはじめた。

遠くから歓声が聞こえてくる。

「ライナ様だわあ〜。」

「ケイトちゃんかわいい！」

「ニーナ様、俺を罵って！」

「エレナちゃん、俺と結婚して!!！」

言いたい放題だ。

(どこのアイドルだよ…。)

そっぴいながら俺も後ろから付いていく。

「おい、あの黒髪って」

「悪魔…。」

「幻の5人目」

(何この差…)

「お前、何したの??」

ライナが首を傾げていた。

その瞬間、門が開かれた。

人が大量のに流れ込んで……来なかった。

「あれ??」

「なんで?」

俺以外の4人がかなり驚いている。

(いつもあの調子だったのか…)

いつの間にか昨日と同じように人垣が割れたので、俺が先頭を歩いていった。

そのまま無事に校舎に着くことが出来た。

教室というか談話室(?)に入り、俺はソファーにどっぴり座る。

5人で紅茶を飲みながら一息ついているとザンザス先生が入ってきた。

「お前らクラン結成したんだってな!この学校の卒業生にも、有名なクランに属している者や自分で作った者など、なかなかの実力者がいたんだから、お前らもその人達に追いつけるよう頑張れりな!」その言葉にエレナが下を向いた。

その様子に気がついたたのは、エレナの一番の親友ニーナだけだった…。

「まあ、今日はセレクターのメンテナンスを行うぞ。」

セレクターは、定期的にメンテナンスを行い出力の調整を行う。

大貴族になると家でやる場合もあるがたいていは武器やかギルドなどでの定期点検で行う。

「お、助かるな最近魔力量が増えた気がするから調整したかったんだよね。」

ライナがバスターブレードを持ちながらそう言った。

「じゃあ、後30分くらいしたら第二訓練場に行ってくれ。」

「りょかい。」

ケイトが俺らを代表して返事をし、30分後、俺らは第二訓練場に向かった。

第二訓練場は、体育館のような建物で中には射撃場のようなレンジが4レーンと剣術の鍛練用の人形があった。

そして魔力測定に使った剣の柄と石版、鏡がありその横には職人っぽい人が立っていた。

「お、ウッドのおっちゃん!!」

「お久しぶりです。ウッドさん。」

「みんな元気だったか??ん、新顔がいるな…。」

「リユーイチ・タチバナです。先日、編入しました。」

「そうかそうか、しっかりした子じゃな。では、早速見ようか。誰が最初かい??」

「俺のお願いします!!」

結局、順番はライナ ケイト ニーナ エレナ 俺の順になった。

「ライナ、少し魔力量増えたなあ。」
「素晴らしいながらバスターソーダに首元からクリスタルを取り出し翳した。」

「火の魔石も問題ないな。よし、終わりじゃ。試してみてくれ。」

ライナがウッドさんからバスターブレードを受け取ると炎を点した。
「問題ないです。さすがウッドのおっちゃん。」

「んじゃ次はケイトちゃんだね。」

そんな感じで俺以外の4人のメンテナンスは終わった。

「最後はリユーイチ君だね。セレクターを見せてくれるかい??」

そう言われて俺はホルスターからディアブロを抜き、ウッドさんに渡した。

「なんだ、この型??ここに居る君以外の生徒のセレクターはすべて私が作ったもので様々な種類があるが、こんな型のは見たことがない!他の露店や店でもお目にかかったことのない型だ。すま

ないが仕組み以前に使い方すらわからない。試しに使って見てくれないか??？」

ちよつと興奮気味なウッドさんにそう言われた俺はディアブロを受け取り、射撃場の2番レーンに立った。

「じゃあ行きますよ??？」

俺以外の5人が脇から息を呑んで見ている。

ウッドさんが頷くのを見ているのに向けてトリガーを引いた。

さすがに慣れてきたとはいえ、いつもの轟音と共に弾丸が飛び出した。その作業を繰り返し4つあったのははじけ飛んだ。

ウッドさんがすぐに近づいてきてセレクターの様子を確かめる。

「なんだこのセレクター…。」

「このセレクターは魔力を弾丸として飛ばすことができます。その弾丸に属性を持たせたり拡散させたりすることも出来る世界に一つしかないオリジナルのセレクターです。」

そう俺が説明しながらウッドさんにディアブロを渡した。

「世界に一つとは…」

そついいながらウッドさんが目の前の的に向かってトリガーを引いた。

しかし、まったく反応がなかった。

「信じられないが、現実で起こっているからなんとも言えない。他の国に同じような効果を持つセレクターは存在するが、こんなに小さくはないぞ??それに魔石も内部に内蔵されてるようだし…。いったい誰の作品なんだ??」

「これは物心ついた時から持っていたので誰の作品かはわかりません。ただ、俺専用で作られたものようです。」

「なるほど、このセレクターはメンテナンスは必要無いはずじゃ。このセレクターは君のために作られたようだから他の者には使えない。素材も見ることが無いものを使っているし、弾に属性を持たせるのは試してみないとわからんが、たぶん全種できるはずじゃ。たぶん、他にも何か秘密があるのだろう。」

「秘密??」

「そうだ。まあ、その件に関してはわしもちよっと調べてみるよ。なかなか、おもしろいものを見せてもらったわ。」

そう言ったウッドさんに俺達はお礼を言い、教室に戻ってきた。

「リユーチってすべてが規格外ね…。」

そこに呆れ顔でこちらを見ている4人がいた。

「まあ、魔法初心者だからまだまだだよ…。」

（しかし、リユーチの力は底はどれ程のものなのか…。そして、こいつが成長した暁には…）
少し気になるーナであった。

第8話 日常の始まり（後書き）

いかかでしたでしょうか？

誤字脱字、不明な表現等ありましたらご指摘ください。

感想もどんどん待っていますのでよろしく願います!!!

第9話 討伐？（前書き）

昨日は投稿できませんでした。

やっぱり雷なっているとときにパソコンをつけるのはちょっと...w

ではごきげん > >

第9話 討伐？

「セレクターのメンテナンス終わったし、ちょっと肩慣らしにいかない??」

ライナの唐突な提案によってそれは始まった

「っというところ??」

「ギルドで依頼受けないか??」

「あ、それいいかも！」

ケイトが早速賛成した。

「他のみんなは??」

俺らも、いい機会だと思いい依頼を受けることにした。

決断したら即実行といわんばかりにライナを先頭に俺達は寮に向かった。

エントランスホールの右側にあるギルド受付で早速事情を話すと奥から数枚の紙を持ってきた。

「皆様は現在Cランクですね。こちらはB、Cランクの依頼の一部です。もし、気に入らなければ他にもありますので御申し付け下さい。」

俺らは早速その紙を見た。

【ハイーナ30匹討伐】

【ラピーヌの花3本採集】

【レビット10匹討伐】

【ピックの卵2個採集】

「色々あるなあ〜。」

「全員でいくなら数が多い【ハイーナ30匹討伐】にしたほうがいいんじゃない？」

ニーナの一言に全員納得し依頼を受けることにした。

「ところで、ハイーナってどんな奴なんだ？」

俺が質問するとエレナが丁寧に答えてくれた。

「ハイーナは基本、群れで行動する魔物よ。攻撃は噛み付いてきたり引つ掻いてきたりするだけなんだけど、かなり素早い魔物だから攻撃を当てるのが大変なの。群れにはリーダー格の『ドスハイーナ』がいるんだけどそいつは魔法を使うものもいて、爪が岩も砕くくらい強力だから気をつけないといけないの。」

「なるほどねえ〜。」

「では、こちらの依頼を受けてくださるのですね？場所が西門から出て、しばらく行ったところにある『ネルファの森』です。」

受付の人に言われて俺らは早速出発した。

「あれ、リユーイチ防具は??」

ケイトに言われて初めて俺以外の皆が防具一式を身につけた状態にあることに気が付いた。

「やっぱ必要??」

「当たり前だろ。」

「ライナとライナに同時に言われた。」

「でも俺、金持っていから…。」

非常に気まずい雰囲気になった。

「あ、あれだ。今回の依頼の報酬でリユーイチの装備買えばいいよな。お、俺らからの餞別ってことだ。」

明らかに動揺しているライナを見て、（こいつ意外と良い奴だなあ）なんて思ったりしていた。

何はともあれ、俺はこの世界に来たときに着ていた学ランに戻り、『ネルファの森』を目指した。

森というのは曖昧なもので明確な入口があるわけではない。だが、いつの間にか森に入っていたようだ。

ハイナがいないか警戒しながら森内部を進む。

そして、しばらくすると開けた場所に出た。

「ヤバいな…。」

「だな…。」

何かに付けられてる気はしたがどうやら囲まれてしまったらしい。

木々の間から、耳が狐のようで全身灰色の魔物が出てきた。

俺らは背中あわせに5方向を向く、手には杖、バスターブレード、レイピア、刀、ディアブロを構えた。

ざっと見、30匹ほどのハイーナが俺達を囲んでいる。

お腹を空かしているらしく、今にも飛び掛かってきそうだ。

そして、ついにそのうちの1匹が動いた。

狙いはケイトだ。すぐさま、ケイトが飛び掛かってきたハイーナに向けてレイピアを突き出した。

胸から背中まで貫いたレイピアを直ぐさま抜き去り地面に絶命したハイーナが転がる。

その様子を見ていたが他のハイーナが唸り声をあげ同時に飛び掛かってきた。

ライナがバスターブレードを振りかざし、目の前の3体が吹っ飛ばす。

すかさず、ニーナが居合切りを食らわすと、頭が胴体から離れ地面に落ちる。

『風よ。炎よ。二つの力を今ひとつに。濛々たる大自然の力を現したまえ。フレイムストーム!!』
エレナの中級混合魔法が炸裂し、ざっと10匹が炭と化した。

俺の目の前に現れた敵は即座にディアブロから飛び出す拡散弾によって頭が吹き飛ぶ。

(まるで、地獄絵図だな…。)
周りに転がっている首だけの死体や眼球を貫かれた死体。そんなものを日本では見たことはなかった。

徐々に数を減らしていき、最後の一匹にケイトをレイピアで貫こうとした時、ハイーナが『キーツ!!』と変わった声で鳴いた。そして、鳴いたハイーナはそのままバタツと倒れた。

(この鳴き声どこかで聞いたことあるような…。)
俺の勘が警報を鳴らしている。

「あれ、最後のやつ勝手に死んじゃった…」

「意外と楽だったね。」

「やっぱエレナの魔法凄いわ。」

そう言っただけ以外の全員が武装解除をした。

「いや、まだまだ!…」

咄嗟に叫んだ。

(思い出した…。あの鳴き声は、例の黒い奴らが仲間を呼ぶときの鳴き声にそっくりだ。)

4人が俺のほうを見て『何言ってるんだ?』的な表情をした。

どうやら勘は当たったようだ。

先程とは比べものにならない大群のハイーナが俺らの元に押し寄せてきた。

「くそっ!」

そういいながらディアブロを連射する。

俺の目の前にいるハイーナ達は肉片となり飛び散った。

慌てながらもケイトとライナが応戦してている。

ニーナは刀を器用に扱い、敵を淡々と倒していた。

(さっきと違い5人が固まっているわけではないので背後がから空きだなあ)

そう思いながら後ろを振り向いた瞬間、俺は目を伺った。

他のハイーナとは比べものにならない、アフリカゾウと同じくらいのサイズのハイーナがいた。

外見も他のハイーナより長い牙、尻尾を鞭の用に地面にたたき付けている様子はまさに『ドスハイーナ』だ。

そして、そいつの前にはエレナが立ち尽くしている。

膝がガクガク震えて、とても戦えるような状態には見えない。しかし、エレナが一番近いケイトはそれに気づいていないようだ。

幸い『ドスハイーナ』もまだ、襲いかかってはいない。

(間に合うか??いや、間に合わせる。)

そう思った瞬間、俺は飛び出していた。

走りながらドスハイーナに向けてディアブロを乱射し、なんとかエレナに近づく。

だが、ディアブロから飛び出した弾丸はドスハイーナの皮膚に弾き返されてしまった。

「なっ!」

やっとライナ達が気付いたようだ。

「リユーイチ。そいつ魔法障壁張ってる!! たぶん上級クラスだから、今のお前には倒す術がない!! ここは退くぞ!!」
ニーナが叫んでる。

俺はなんとか、エレナの元にたどり着いたが、ドスハイーナは目と鼻の先まで迫ってる。

「おい、エレナ。退くぞ!!」

「あ、あ、あああつ。」

かなりの混乱状態になっていて、全く動こうとしない。

「おい、ニーナ。こいつの弱点とかねえのか??」

「ドスハイーナの弱点は雷だが、その結界は雷属性じゃ破れないぞ!
!今は退くぞ!!」

(なぜだろう?こんなにもヤバい状況なのに、ワクワクしてる??
しかも、こいつの使い方が頭に直接流れ込んできた。)
そう思いながら、右手のディアブロを見た。

『我が宿命を持って、今ここに一発の弾丸を精製する。雲より落ち
し雷の力、すべてを破壊し無に返す破の力よ、弾丸の形を成して、
敵を打ち砕かん。』

俺が高らかに詠唱すると、左手の掌に魔法陣が現れ、一発の弾丸が
精製された。

それは、破を表す透明と雷を表す黄色が混ざった不思議な弾だった。

直ぐさま、ディアプロのマガジンを取り出し弾丸を込める。

チャキンツという音と共にマガジンを挿入し、Diabloの文字を人差し指でなぞると、文字が金色に輝きだした。

（後は撃つだけか…。）

俺はエレナの前に立ち

「すべてを破壊する雷、サンダーブレイクショット!!」
と叫びながらトリガーを引いた。

グウォーン!!

銃口から火花を出しながら1発の弾丸が飛び出す。

スライドが後ろに勢い良く後退し、透明な薬莢が飛び出した。

薬莢は回転しながら跳ね上がった。

発射された弾丸は反時計回りに回転しながら目標に一直線に進んでいく。

ドスハイーナの腹の当たりに命中し、魔力障壁が粉々に崩れ落ちる。弾丸の勢いは止まらず、そのままドスハイーナの内部に侵入し、大量の放電を行う。

弾丸が背中から飛び出し時にはドスハイーナは内部から破壊されていた。

バタツ。

ドスハイーナが倒れるのと同時にスライドから飛び出した葉莖が地面に落ちる。

「大丈夫かエレナ!!」
慌てて俺がエレナのほうを向き返ると今にも泣きそうなエレナがいた。

どうしたらいいのかわからずしゃがんで、エレナの肩に手を置くと…抱き着かれた。
啞然として何か言おうとしたが睨り泣き始めたエレナを見て、あきらめることにした。

「ヒクッ。ヒクッ。怖かったよおお…。」

その様子をニーナが渋い顔を見ていた。

しかし、他の二人は…

「倒しちゃった…。小型のものでAランク、大型のものではSランクのドスハイーナを…」

「規格外だとは思っていたけどあんな強烈な一撃、人間が扱える代物じゃない…。」

そんな会話をしていて、龍一とエレナが抱き合っていることには気がつかなかった。

そのまま気を失ってしまったエレナを俺が背負い学校に帰ることにした。

ニーナの的確な指示で、換金できるハイーナの素材はすべて剥ぎ取り、それを他の3人が背負っているので文句は言えないだろう。

なんとか寮に戻ってきた俺達はそのまま、エントランスホールのギルド受付にやってきた。

「依頼終わった報告と換金をしたいのですが…。」

「はい。どうぞー！」

受付の人にそう言われたので3人は背負っていた素材を床に広げた。

奥から関係者が3・4人出てきてカウントする。

「あれ？これってドスハイーナのものじゃない!!」

「なんと…。」

職員の人達の間には衝撃が走る。

「ハイーナ96体、ドスハイーナ1体ですね。」

「このドスハイーナは魔法障壁を使うSランクの魔物ですので、皆さんはランクがBランクに上がりました。メルリングとギルドカードを出してください。」

そういつて俺らがメルリングとギルドカードを出すとそれらが輝きだした。

「なんだこれ？」

光がやむとメルリングの形状が変わっていた。ギルドカードも左上にBと書かれている。

「ランクが上がるとこのようになります。ただ、克蘭のほうは今回は、ランクが上がっていませんのでお気をつけてください。」

「そして、こちらが報酬と換金料金です。報酬金は依頼はBランクの【ハイーナ30匹討伐】を3回分とSランクの【ドスハイーナ討伐】の合計で金貨10枚と銀貨42枚、買い取りが合計で金貨9枚と銀貨14枚です。」

そういつて机に置かれた袋はとても重かった。

後で聞いた話だが、宝貨1枚⇨金貨100枚、金貨1枚⇨銀貨100枚、銀貨1枚⇨銅貨100枚だそうで、一回の食事が銅貨5⇨1

0枚だそうだ。そして、平民の年収が金貨2枚程度だ。

つまり

銅貨 100円

銀貨 10000円

金貨 1000000円

宝貨 100000000円

ってことだ。

すると…今回の依頼は19560000円の報酬ってことだ…高…！

「このまま買い物でもいいが、今日は疲れたから明日にしよう。」
ニーナの提案に全員賛成しそれぞれの部屋に帰った。

ギルドについてからも一切しゃべらなかつたエレナを部屋まで送り
俺も部屋に戻った。

夕食を食べる元気はなかつたので、シャワーを浴びて寝ることに
した。

第9話 討伐？（後書き）

いかかでしたか？

誤字、脱字、不明な点等ありましたら報告していただけると助かります。

もちろん感想もお待ちしております！！

第10話 買い物(前書き)

ちよつと間が空きました。

今後の流れを考慮しつつなのでこれから更新が少し遅くなるかもしれません。

では、どうぞ^^

第10話 買い物

「ここは…。」

『異世界の生活にはなれたかな？？龍一君。』

そう。ここは例の応接間。神様も俺もソファーに腰掛けている。

「まあ、ボチボチだな。」

『ん。先日と比べると大分表情が和らいだな。』

「そうか??？」

ところなしか、神様が笑顔になり

『こちらでの仲間とは上手くやっているようじゃな。』

「まだ、わかんねえよ。」

『そうか、そうか。まあ、仲間を大切にすることは良いことじゃよ。』

(絶対、今日の様子見てたよな…。)

「まあいいや。それより、ディアプロの使い方が頭に流れ込んできたけど、あれはなんだ??？」

『あれは、まだ説明していなかった部分を直接、お主の頭に流し込んだのじゃ。まあ、もう一度説明しておこう。分かっているとは思

うがディアブロはセレクターとしては異質な物だ。まず性能は龍一の魔力を弾丸として撃ち出すこじや。それは前に説明した通りだが、弾丸の性質も威力にも限界があるのだ。通常の弾丸は、普通の物体に対してなら大ダメージを与えられるが、結界などの魔法で精製されたものにはダメージが与えられない。昨日のような魔力障壁がい例じゃな。』

(やっぱ、昨日見てたのか。)

『そこで、使うのがハイブリット弾だ。』

ハイブリット弾とは、昨日龍一が精製した魔法で属性効果をプラスしつつ魔力を圧縮して詰め込んだ弾丸のことじゃ。それを魔力で撃ち出すのだから、威力は通常射撃の10倍ほどだ。ただ、ハイブリット弾は通常の銃の弾丸と同じで使い捨てだから連射はマガジンに入る6+1発が限界じゃ。まあ、ハイブリット弾を戦闘前に作っておけば問題ないじゃろ。念のため、空のマガジンも4個渡しとくぞ。』

「説明助かったわ。マガジンもありがとな。」

『礼には及ばんよ。ハイブリット弾を用いた射撃はDiabloの文字を指先でなぞり、文字が金色に輝いている時に可能じゃ。』

「了解。さてそろそろ起きますか。」

『龍一。ディアブロは大切な人を守るための力じゃ。それだけは忘れてはならんぞ』

「わかってるよー!!」

そう言う俺の意識は徐々に薄れていった。

「ふあゝああ。」

やはり、朝は苦手だ。

夢の中で神様と話していたせいか、あまり疲れが取れた気がしない。それに、今朝はいつもより2時間も早く起きてしまったのだ…。

既に日課になってる朝シャワーを浴び、着替えを済ませた。

ふとそこで気が付いた。

ベッドの上に神様が言っていた通りにディアブロのマガジンが4つ置かれていたのだ。

「サンキュー、神様」

そう呟いてベッドの上に座る。

(まだ、登校時間まで余裕あるし、試してみるか…。(

『我が宿命を以って、今ここに一発の弾丸を精製する。大地を燃やす紅蓮の炎の力よ、弾丸の形を成して敵を打ち砕かん。』
すると、真つ赤な弾丸が掌に現れた。

続けて

『我が宿命を以って、今ここに一発の弾丸を精製する。夜より深い暗黒の闇の力よ、弾丸の形を成して敵を打ち砕かん。』

先程と同じように掌に弾丸が現れた。今度は真つ黒な弾丸だ。

どうやら昨日のみたいに何種類の属性を混ぜることも一種類だけで作ることも可能なようだ。

この動作を繰り返し、合計、50発程弾丸を精製した。
内訳は全属性の弾をそれぞれ3本ずつと、何種類か組み合わせた弾丸を合計20発である。

作業自体は1時間程度で終わったのだが…魔力をかなり消費し疲れ
たので、そのまま寝てしまった…。

そのころ3年S組の教室では…。

「あれ？リユーイチは??」

「そついえば今日来てないね??体調でも崩したのかな?」

「サボりだな!!」

「私のせいかな…。」

3人で紅茶を飲んでいるなか一人ソファでクッションを抱え込み、表情が曇っているエレナがいた。

どうやらエレナはまだ、昨日のことを引きずっているようだ…

「ま、放課後お見舞いでも行ってやるか!!」そんな様子を見かねたライナが言うと皆、賛成しているようだった。

コンッコンッ

「遅れました!!」

昼近くになってから龍一が教室に入ってきた。

今日は、午前中は模擬戦をしたため、皆かなり疲れているようだ…。

「リユーイチ遅すぎ!!」

「サボりか??」

「なんかあつたのか??」

3人が俺に近づいて聞いてきた…。

「いや、昨日の疲れで二度寝したら…。」
と正直に答えてみた。

「それ、サボりじゃね?」

ライナにいわれるとちよつとイラツとくる。

そんな中、突然声がした。

「昨日はすいませんでした!!」

そう。エレナだ。

しかも、頭を下げたまま一向に上げる様子がない。

「どうした、エレナ??」

慌てた俺がエレナに聞くと…。徐々に顔を上げた。今にも泣きそうな様子だ…。

「昨日は本当にごめんなさい。ドスハイーナが目の前に来た時、頭の中真っ白になっちゃって…。みんなに迷惑かけて…。今まで魔法には自信があつたけど、それはあくまで、学生の間だけの話。S級の魔物がでて死ぬかもしれないと思つたら体が動かなくなっちゃつた…。そのせいでリユーイチを危険な目に遭わして…。わたし、わたし……………」

そういいながらまた、謝ろうとしたエレナの頭を撫でてやる。

「エレナ、結局は誰も怪我しなかつたんだからいいだろう??誰だつて死ぬのは怖いんだから、エレナの反応は普通のことだと思つよ。それにS組の仲間なんだから助けて当たり前じゃないか?」

(神様の言ってる通りかも…。この前までだつたら何も出来ずに諦めてたはずなのに、今はこんなセリフまで言ってしまうなんて…)

「でも…」

「これから、もつとたくさんの実戦経験を積んでいけばいいんだよ。そのためなら俺も協力するし、それでこそ仲間だろ？ クランだってそのためのものだろ？」
「そういいながら他の4人をみる。」

エレナも納得したのか黙ってしまった。

そのまましばらくエレナの頭をなで続けてやると徐々に落ち着きを取戻し「ありがとう…。」と消え入るように言った。

「さて、これからどうする？」

「授業は明日、明後日は休みだし買い物に行かない？」

「リユーイチの装備買わないとだもんね！」

「賛成！」

「わかった。。。」

「私も行きます…。」

こうして、俺達は学園の外にある街に向かうことにした。

「ここが街かあゝ」
来るときにも通ったが、ゆっくり見ることは出来なかったのも新鮮だ。

とても活気があり、商人達が声を張り上げている。大通りに出ると

その勢いはさらに増した。

まずは、目的の武器、防具屋に向うことにした。

カランツコロン

ドアの上についた鐘が快い音を立てる。

「いらつしやいませ。」

女性の店員さんが笑顔で挨拶してきた。

店内はとても広く、壁には剣や刀、槍、弓、斧、杖など様々な武器が壁には掛けられている。

「1階が武器専門、2階が防具専門、3階がセレクトター専門です。」
店員さんの説明の下、さつそく2階に向かう。

2階も1階と同じように壁に様々な防具が置かれている。

中世っぽい鎧やプロテクターみたいなものなど種類や形、材質も様々だ。

壁に掛けられたものを一品一品見ていく。

俺の戦闘スタイル的には軽いものがないなあ〜と思っているとき、
1つの防具に目を奪われ立ち止まった。

一見、ライダースーツのようにも見えるジャケット、ズボン、指の部分がない手袋すべて真っ黒に統一されてる物だった。

「これなんですか？」

「これは、ヴィン・ナースが作成した防具で魔法障壁を展開することが可能ですが、使用者の魔力が少ないとただの衣服となってしまうため、持ち手を選びます。」

「じゃあ、これにします。」

即決した俺に店員さんも「え？」と呟いたが直ぐに壁から防具を外し会計まで持っていた。

「ギルドカードの掲示をお願いします。」

そう言われカードを渡す。

「ありがとうございます。S組の方は特別料金なので半額の金貨3枚です。商品は後で寮まで届けますのでご安心を。」

俺は金貨を渡し、みんなと合流した。

「ところで武器とセレクター何が違うんだ??」

「武器とは魔法の使えない一般の兵士が使うものだ。そのため、魔力による付加機能はあっても自分で発動できるものはない。対してセレクターは自分の魔力を消費し技を放つことが出来るものだ。武器として使うことも出来るし、物によっては防具ともなるしな。」

二ーナの説明を聞きながら俺らは3階に来た。

1・2階と違い、壁以外にも棚の上に様々な種類のセレクターが置かれている。

初心者向けの短めの杖や火の属性を持つ剣など様々だ。

特に目的があるわけじゃ無いのでのんびり見て回る。

ふと棚にポケットのような物が掛けられているのに気が付いた。

(もしかしたら…)

そう思って、ディアブロからマガジンをとり出してみる。

(ピッタリだ!)

「すみません。」

近くにいた店員を呼び付けた。

「なんででしょう?」

「これと同じものを4つ頂けますか??」

「多機能タイプのセレクターケースを4つもですか??」

「はい。お願いします。」

そういって、すぐに会計を済ませた。

後で聞いたのだが多機能タイプとは、自分があらかじめ入力した魔法を魔力を注いで起動させ使用するもので結界などを構成する際に役に立つそうだ。ただし、通常状態で使うよりも魔力を消費するうえ、魔力を入力することが困難なためメインのセレクターというよりサポート用のセレクターとして魔法騎士団などで使われることが多いそうだ。

武器、防具屋を出た後は女性陣の強い要望と俺個人の頼みで洋服屋に向かった。

私服として着られるものをライナとちゃっちゃんと選んだのだが、女性陣はまだ決めかねていた。そこで先に会計を済ませ、街をブラブラすることにした。

ライナと街を歩いていると周りの視線が痛い…。

先程も感じてはいたが、今回は主に女性からの視線が痛いのだ…。S組は目立つからしょうがないといえばしょうがないのだが…。

しばらく歩くと何やら揉め事が怒っているようで野次馬が押し寄せてる。

俺らがそこに近付くと自然と人々が道を空けてくれた。

そこには、初登校の時にいたあの連中がいた。

そしてそいつらは小さな男の子を殴りまくっていた。

「何してんだ??」

「おお、これはこれはリユーイチ君にライナ君。S組がわざわざ街に何の用かな??」

「お前らには関係無い。お前らこそ小さい子を集団リンチなんて馬鹿げたことをやってんな」

ライナが真剣な表情で睨み返す。

「こいつが貴族である俺の前を堂々と横切ったから躡けてるだけだ。お前らには関係ない。」

「一人では何もできないカス野郎だな…」
ぼそつと俺も呟いた。

「おい。お前、金積んで編入したくせに大したご身分じゃないか。雑魚は引っ込んでろ。」
貴族野郎がそう言うてきたが、俺にとってはどうでもいいことだったのでスルー…しようとした。

「リユーイチ、お前の力見せてやれよ。」
ライナは完全に頭に血が上っているようだ…。

「面白い！それは、決闘の申し込みとして受け取るぞ。」
「ちよっ！」
俺の意志を完全に無視して話が進んでいく。

「日時は明日の13時、場所は闘技場だ。覚悟しとけよ！」
そういつて、貴族野郎達は大通りのほうに戻っていった。

(どうでもいいや…それより。)
「大丈夫か？坊や。」
殴られてけがをしている少年のほうを向く。

「ひっ！」
どうやら少しおびえてるようだ。

「とりあえず、これやるよ。」

俺はポツケから飴玉を取り出して少年に渡した。

「噛むなよ？なめとけば味がするから。」

ちなみにこれは、この世界に来るときに着ていた俺の学ランに入っていたものだ。

少年は飴玉を口の中に入れると

「甘い！」

と喋って笑顔になった。

つとそこに買い物を終えた女性陣がやってきた。

「リユーイチ、その子どうしたの？」

そういわれたので事情を説明するとエレナが杖を取り出した。

『光よ、治療という名の慈悲をこの者に与えたまえ。ヒーリング！』
光の中級魔法ヒーリングだ。

みるみる少年の怪我は治っていった。

「わあ、ありがとうお姉ちゃん！」

笑顔の少年にお礼を言われてエレナもクスッと笑った。

（サンキュー、少年！）

その後、少年の母親や友人らに感謝されながら俺らは寮に戻ることにした。

「そういえばなんで俺らの場所が分かったの??」

「リユーイチの黒髪にS組の制服だもん、目立たないわけないじゃん…」

自分が認識していたのよりはるかに俺は目立っていたようだ。

「それより、決闘どうするの??」

「なんとかなるだろう。」

「それが…。あいつのこと、知ってる？」

「いや。何も…」

そういうとニーナが俺のほうを真剣に見てきた。

「リユーイチ。あいつのせいでS組はずっと4人だったんだ。」

「つとというと？」

「あいつの魔力量は私より高い。加えて、技量もトップクラスだ。」

しかし、あいつは入学試験の時に周りにいたほかの生徒も巻き込むような上級魔法を使って、12人に大怪我させたんだ。それが原因で一時は退学扱いになるところを、親の権力を利用して無理やりこの学園に入学したんだ。」

「なるほどな。」

「だから…」

ニーナがしゃべろうとするのを止めさせた。それ以上は聞かなくてもわかる。

「ま、頑張るぞ。」

その後、俺らはすぐに自室に戻った。

衣装室には買った防具と私服が届いていた。

「決闘か…。ハイブリット弾使う必要があるかもな。あいつ気に入らねえし…。」

そう、あの貴族連中が前の世界で俺を利用していたクラスメイトと似ている気がしたのだ。

非殺傷の特製弾をニヤニヤ笑いながら作っている俺だった…。

第10話 買い物（後書き）

いかがでしたか。

ディアブロの性能の詳細を出してみました。

少し、チートな気がしますが…w

誤字、脱字、変な表現等の報告ありましたらお願いします。

感想、ご意見もお待ちしています。

第11話 決闘、そして…（前書き）

更新遅れました。

人物紹介、今作っていますので近日中に公開ができると思います。
それではどうぞ^^

第11話 決闘、そして…

今朝は、いつもと違って目覚めがよかった。

毎度のことながら、ベッドから起き上がりすぐにシャワーを浴びる。

「決闘かあ〜。」

前の世界で、喧嘩になったことはあっても正式な決闘を申し込まれたことはなかったので、ちょっと新鮮だ。

朝食を取ると昨日買ったライダースーツみたいな防具+ジャケットを羽織った。

続いて、腰周りにマガジン用のポケットを4つ取り付け、ホルスタ―とぶつからないようにする。

髪をいつもと違いしっかりと整えて、ブーツのような靴を履き食堂へと向かった。

ちなみに、靴のまま部屋に入るのが普通なのだが、日本人の習慣的に慣れない…。

そして、一番奥の窓側の席にいつもの4人がいた。

カッツカッツ。カッツカッツ。

ブーツのような靴から歩く度に音が鳴る。

食堂の扉を開け中に入ると、いつもより人が多かった。（下級生かな???)

「あれ…誰??」

「かつこいいい…」

「全身、黒一色…。」

まわりにヒソヒソと話されながら奥の席に着いた。

「悪い、待たしたか??」

「リユーイチだよな…??」

ライナを含めいつもの4人全員が啞然として俺を見ている。

「そうだけど、何驚いているんだ??」

いつものボサボサな髪と違い、しっかりと整えた髪に全身黒一色の格好は普段の龍一のイメージとは全く異なるものだったのだが、本人には全く自覚が無い…。

「いや…その格好どうしたんだ？」

「ん？決闘だから気合入れてきたつもりだけど変か??」

「変じゃないけど…。」

ライナが言葉につまり女子の方を見る。

…が、無視されたようだ。

「勝つ自信は??」

「全く無い。」

「え？」

「だから自信は無い。」

「なんで!??」

「だって、決闘なんてしたこと無いし…。」

一気に場の空気が重くなった。

「ま、なんとかなるでしょ！」
つというライナの一言のおかげで直ぐに元に戻ったが…。

「そういえば、みんな見に来るの??」

「もちろん!!」

「しっかり応援するよ!!」

(なんか、こうやって誰かに応援されるのって両親以外だと初めてかもな…。)

「あれ??リユーチ泣いてる?」

「え!なんかマズイこと言った?」

「…いや。なんか、応援されるのがちょっと嬉しくてさ。」

「仲間を応援するのは当たり前だろ!!」

「まあ、負けたら罰ゲームだけだな!!」

「ハハハ…。」

そんな会話をしつつ、朝食をしっかり食べた。

食後の紅茶を飲み、少し時間を潰した後、俺らは闘技場に向かった。

例の如く、門のところに入が殺到していたが今日はいっになくソワソワしている。

それもそのはず、今日はザンザス先生主催の下、全国生徒の午前授業を中止しての決闘なのだ。

ザンザス先生は生粋の戦闘狂らしく、ただの生徒同士の決闘を理事長に掛け合ってイベントにしたらしい…。

そんなこともあり、生徒達の間では謎の編入生の実力が知れる良い機会だと、期待が高ぶっているのだ。

闘技場の入口で皆と別れて、俺は控室へと向かう。

(なんか、ちょっと緊張してきたなあ)

控室にあった椅子に座り、ディアブロのマガジンをチェックする。マガジンは4本すべてに非殺傷の性質を持った弾を装填してある。ジャケットのポケットにお守りの一発を入れ、防具の魔法障壁も確認する。

ちなみにこの魔法障壁はある程度のレベルの魔法では、傷一つ付かないそうだ。

いよいよ、場内が騒がしくなってきた。

(さて、子供相手にあんなことをする下種野郎をボコボコにするか！)

ディアブロをホルスターに戻し、俺は歩き出した。

小窓から様子を伺うと場内は満員だった。生徒以外にもたくさんの方が見に来ているようだ…。

「長らく、お待たせしました。本日は、ザンザス教諭主催『本当の

強者は誰だ??』にお越しいただきありがとうございます。さっそ
く試合に移りたいと思います…。」

(な、なんだあのネーミングセンスの無さ…。)
俺のツツコミは誰にも届かず場内が静かになる。

「まず、ルール説明です。今回の試合の勝利条件は相手が、気絶す
るか降参するのかのどちらかです。ただし、殺害を目的とする攻撃
は禁止です。その場合は失格となります。」

理事長が説明を終えるとまた、場内はまた騒がしくなってきた。

理事長に代わって司会が話し始めた。

「では、さっそく選手紹介だ!! 謎の編入生、リユーイチ・タチバ
ナ!! 実力は今だ未知数。どれ程の実力なのか?? 注目したいとこ
ろです!!」

紹介を受けたので中央に向かって歩いていく。
ライナ達が手を降っているのが見えた。

(あそこって貴賓席じゃ…)

「対するは、A組トップの実力を持つロイ・ブリュッセル!! あの、
王国四大貴族ブリュッセル家の跡取りだ!! 魔力もこの学校で1・
2を争うほどあるという噂もあるぞ!!」

そして、登場してきたのはキザ野郎+仲間8人だった。

場内がまた、静けさを取り戻す。

「貴様、よくも我等を愚弄したな。今日はたっぷり可愛がってやる。」

(どこの悪役だよ…。)

「そうそう、君はS組で僕はA組だからハンデを作らしてもらったよ。まずは、腕試しにこの8人と戦ってくれ。もちろん、嫌だとは言わないよね??」

(決闘に仲間連れて来るとはな…。)

上を見ると理事長も困った顔をしている。

「どうせなら全員で来たら??」

俺が言っていると場内が一瞬でシーンとなった。

そして…

「ルール変更です!!リユーイチ・タチバナVSロイ・ブリュッセル+8人の対戦です!!」

その言葉に場内がワーツと盛り上がった。

場内が落ち着くのを待ち

「両者用意はいいかな??それでは、試合開始!!」

その言葉と共に鐘が鳴る。

鐘の音と共にディアブロを抜く。

それと同時に8人が突っ込んで来る。

『求めるは雷鳴。サンダー!!』

『求めるは地鳴。アース!!』

『求めるは風鳴。ウインド!!』

(いきなり中級魔法かよ!!)
俺に向かってきた魔法を防具に魔力を流し込んで発生させた魔法障壁で防ぐ。

すると後ろから2人が剣で切り掛かってきた。

咄嗟に横に避ける。

切り掛かってきた二人に向けディアブロの通常射撃を食らわす。

ダンッダンッ。

とりあえず、2人down。

「気をつける、あいつの攻撃は遠距離だ!! 離れると危険だ!」
敵の一人が叫んでいる。

「炎よ。弓の形を成して彼の者を撃ちたまえ。ファイヤーアロー!」
俺に向かってきた炎の矢を魔力障壁を発生させ防ぐ。

すぐさま、先程から俺に攻撃魔法を浴びさせてる4人に向かって、トリガーを引く。

ダンッダンッダンッダンッ。

4発の弾丸が奴らに向かって飛んでいくが、途中で消えてしまう。

(結果か!! だが、誰の魔法だ??)

っと、いきなり後ろに気配を感じた。

シュツ。

何かを紙一重で避けたが、少し掠ったのか頬に一筋の血が流れる。

反撃しようとしたが、そいつの姿が見えない。

(どこ行っただ??)

ふっと目線を前に戻すと…ロイの周りに大量の魔法陣が発生していた。(マズイ!!)

そう思った瞬間、以前エレナが使っていた魔法を思い出した。

『大気の水よ。我等を守りて、氷の壁と成せ。アイスバーク!!』
そういいながら左手を前に出す。

140

……シュンツ。

あれ?

魔力を消耗したが、結界は発生しない。

(何故だ…。)

そんな、俺の様子に構わずロイの魔法を発動させた。『…自然の怒りを具現かせよ。アースインパルス!!』

「精霊魔法だ…。」

客席からそんな声が聞こえた気がした…。

凄まじい音と共に地割れが発生し、俺にに向かって数百数千の岩の塊が飛んで来る。

避けるのは無理だと判断し、魔法障壁を発生させた。しかし、精霊魔法による攻撃は凄まじく、ただの魔力障壁じゃ耐えられなかった。

ジャケットの一部が破け、左足と背中に激痛が走る上、身体のおちこちが痛い。

「酷い有様だな！降参するかい??」ロイが笑いながらそう言っているのが聞こえた。

「まだまだだね。」

すかさず、俺が答えるとロイが次の詠唱に入る。

（魔力障壁も使えないとなるとやばいな…。それに、避けるのは不可能だし…。ハイブリット弾使ってさっさと終わらせるか。）

そう決心し、ディアブロを持ち直し『Diablo』の文字をなぞる。

光りだした文字を確認し、両手で銃を構える。

「ダークフレアショット!!」

そう言いながらトリガーを4回引く。

ダンッ。ダンッ。ダンッ。ダンッ。

轟音と共に飛び出した黒炎を纏った弾丸が先程の4人に向かって飛んでいく。

結界に一瞬止められたようにも見えたが、ぶち当たった場所から崩れていきそのまま、貫通する。

ロイの仲間達は、何が起こったのかも判らぬまま意識をうしなった。ちなみに撃った弾は拡散式の閤&・炎属性弾（非殺傷）だ。破属性と同じで魔法障壁を打ち砕く力がある。

「なんだ、あの威力…。怪我してるくせに、一撃で結界を破るほどとは…。」

ロイも少しビビったらしい。

（…にしても残り二人はどこだ??）

6人down。

残りロイ&・2人。

場内の人から見れば俺ら二人が対峙しているように見えるが、残りの二人がいない。

シュツ。

その音と共に手の甲に痛みが走る。

（どこだ??）

今度は連続で、何かが切り掛かって来る。

(これは…、鎌鼬か！！)

そう判断した俺はロイと少し距離を取り相手を探す。

(気配が感じられないんだよな…。)
少し考えながらロイを見るとまた、精霊魔法を撃とうとしているようだ。

(マズいな…。 とりあえず敵をあぶり出すか…)

『炎よ。数多の力を我に貸し、幾千の炎の玉と成せ！ファイアーボール！！』

エレナ達に見せたときよりも一発の威力を落とした代わりに数を増やしてみた。

場内が騒然となった。

今や、数万の炎の玉によって形成されたドーム状の炎の膜は圧巻としか言いようがなかった。

そしてついに見つけた。

視界の一部で何も無い空間が揺れている。

「そこだ!!」

そう言つて俺が手を振りかざす。

ドーム状の炎の玉が一斉に2人を襲つ。

結界にはいくつもの輝が入り碎け散る。

「ぎゃああゝ!!」

その声と共に二人が倒れる。

残り、ロイ。

「ついに俺ら二人だけだな。」

「ちつ。使えない奴らだ…。まあいい。本気で行くぞ。」

俺はディアブロ、ロイは鎌を構える。

ダンッ。ダンッダンッ。ダンッ。

俺はロイに向かって連射しながら様子を伺っている。

それが解っているのかロイも鎌で弾を凌いでいる。

「ムーンスライス!!」

そう叫びながらロイが鎌を振るう。

既に、輝だらけの地面に俺に向かって一直線に亀裂が入る。

(これ…まるで、月 天衝だな…。)

魔力障壁を張りつつなんとか、横に避ける。

少し体制を崩した俺に、ロイが連続で、『ムーンスライス』を連続で撃ってくるので、防戦一方だ。

負けずとディアブロを撃つが、照準が定まらずロイには当たらない。

「ちっ!!」

動く度に激痛がはしり、まともに戦うのも厳しい。

ふと、ロイを見ると持っている鎌が輝きだした。

負けずと『Diablo』の文字を発光させる。

『ダークフレアショット!!』

ロイの技が完成する前に射撃をする。
ダンッ。ダンッ。

「ちっ!!」

ロイの鎌が発光がやむ。
『ムーンスライス!!』

カンッ！
弾丸と衝撃波がぶつかり相殺する。

しかし…。
俺が撃ったもう一発の弾はロイの肩に当たった。
付けていた肩当てが吹き飛び血が飛び散る。

「くそ！！」

ロイが叫ぶと同時に鎌がまた、発光し始める。

すぐにディアブロを撃つが通常射撃では弾かれてしまった。

鎌の光がどんどん増幅している。

（仕方ない…。）

俺はジャケットのポケットに入っている一発の弾を取り出す。

（まだ、試したことないけどなんとかなるだろう…。）
ディアブロのマガジンを抜き、その弾を装填する。

その瞬間、『Diablo』の文字が銀色に発光し銃身に龍の模様が浮かび上がる。

『切り裂きの鎌レーザー。火を消し、水を散らし、地面を砕き、風を裂き、その斬撃をここに示せ。ヴェロニカ！！』

『魔を司り、神から授けられし銃、ディアブロ。森羅万象を表し、創造、破壊の形を示せ。ディスプレイパクト！！』

ロイの鎌から巨大な衝撃波が、俺の銃から光を纏った弾丸が放たれる。

弾丸は七色に光ながら徐々に銀の龍を形成していき、衝撃波をいとも簡単に打ち砕き、砂埃を切り裂くように飛んでいく。

ロイが自分の技を砕かれたことを自覚することなく、意識を闇の中に沈めた。

実は客席からは、龍一がファイアーボールを放った辺りからは砂埃がひどく何が起こったのか、視認することができなかった。そして決着が着いてしばらく経った今になって砂埃が消え倒れているロイ+8人とホルスターにディアブロを戻している龍一の姿を確認することができた。

「試合終了！……！勝者リユーイチ選手！」

その言葉と共に場内から声援が送られる。

そしていつまでも止まぬ拍手の中俺は、何もせずただ立っていた。

試合が終わった後、俺の肩や全身の傷はエレナの水属性特有の癒しの魔法によって、大体の怪我が治った。しかし、念のために一日保健室に泊まる羽目になった。

一方、ロイ達は一切傷は無いのだが意識が丸一日戻らなかった。どうもディアブロの弾に非殺傷の性質を付けると意識のみを刈り取るらしい…。

なんやかんやで、決闘から二日経ってしまったが今日、ついに先生から許可をもらったので午後から平常授業に参加することになっている。

コンッコンッ。

「失礼します。」

そう言つてS組の教室の扉を開けると…。

「おかえり!!」

エレナを筆頭にいつもの4人が俺のことを笑顔で迎えてくれた。それから、あの砂埃の中で何があったか根掘り葉掘り聞かれたが、俺も曖昧にしか覚えてなかったので満足のいく答えが出来なかった。

「そういえばさ、前にエレナがやってた結界の魔法試したんだけど、何故か発動しなかったんだよね…。なんで分かる??」

「あれは… 上級魔法だからリユーイチの制御力じゃ発動できないよ…。」
エレナがそういうと教室に気まずい空気が流れる。

すると、そこに理事長とザンザス先生が入ってきた。

「リユーイチ君。先日の決闘、なかなか良い試合だったよ。S組足るもの他の生徒より圧倒的な力を持つべし……。」

ザンザス先生のスピーチがはじまろうとしたところで理事長がそれを制した。

「確かにリユーイチ君は素晴らしい試合をしてくれましたが、今日はその事より重大なお知らせがあります。実は今年は、S組にもう一人メンバーが加わります。その方…いや、その生徒はちょっと訳ありますので心して下さい。」いつになく、ザンザス先生も理事長も真面目な顔をしている。

「まあ、その生徒がやってくるのは一週間後なので、楽しみにしてして下さい。」

そう言って理事長が出ていく。

「転校生かあ。」

「どんな人かなあ。」

「しかし、S組に編入するということはなかなかの実力者かもしれない。」

「確かに…。」

「まあ、期待して待つてな！！あ、それから転校生が来たら実践魔術の授業始まるからな！！」
「そう言っつてザンザス先生が教室から出ていく。」

俺らも支度をして、

「転校生かあゝ。」

「何者か気になるな。」

などと話ながら寮に向かった。

第11話 決闘、そして…（後書き）

いつの間にかPV15000、ユニーク25000超えていました。
読んでくださっている方ありがとうございます^^

これからもよろしくお願いします^^

誤字脱字、おかしな表現等あれば報告お願いします。
感想もいただけるとうれしいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8770n/>

Angel or Devil ~ 笑顔を無くした少年の物語 ~

2010年11月10日02時12分発行